兵庫県文化財調査報告　第32冊

明石城跡 II

1986. 3.　兵庫県教育委員会

明石城跡 II 1986・3

兵庫県文化財調査報告　第32冊

明　石　城　跡　II

１９８６年3月

兵庫県教育委員会

例　言

1．　本書は、明石市明石公園１の２７に所在する明石城跡の発掘調査報告書である。都市緑化植物園整備工事に伴う発掘調査報告書を昭和５８年度に刊行しており、今後も明石城跡の調査が行われ、同名の報告書が刊行されるものと予想される。そのため前書をⅠとし、本書を明石城跡Ⅱとし通し番号を与えることとする。

2．　調査は、財団法人兵庫県公園協会の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が調査員を派遣した。

3．　整理作業は、兵庫県加古川土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会が兵庫県埋蔵文化財調査事務所で実施した。

4．　遺構の写真は調査員が撮影した。図版１の航空写真は㈱富士測量が撮影したものである。

5．　遺物の写真は森 昭氏に依頼し撮影していただいた。

6．　執筆分担は本文目次の通りである。

7．　本報告にかかる遺物・スライドなどは、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２丁目１―５）ならびに魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下６３０―１）に保管している。

目　　次

Ⅰ．はじめに……（渡辺）……1
　1．調査に至る経過
　2．調査の組織
　3．調査日誌

Ⅱ．調査結果……（渡辺）……6

Ⅲ．出土遺物
　1．土器……（岡田）……10
　2．瓦……（森岡）……19

Ⅳ．おわりに……（渡辺）……36

図 版 目 次

図版１　明石城航空写真
図版２　（上）調査地遠景（巽櫓から）
図版２　（下）調査地全景（南から）
図版３　（上）調査地全景（北から）
図版４　（上）SK０１・０４・０５
図版４　（下）SK０６
図版５　出土遺物（SK０１～０６）
図版６　出土遺物（肥前系染付磁器）
図版７　出土遺物（擂鉢・施釉陶器）
図版８　出土遺物（土師質土器・瓦質土器）
図版９　出土遺物（擂鉢）
図版10　出土遺物（擂鉢・施釉陶器）
図版11　出土遺物（施釉陶器）
図版12　出土遺物（施釉陶器）
図版13　出土遺物（施釉陶器）
図版14　出土遺物（染付磁器）
図版15　出土遺物（染付磁器）
図版16　出土遺物（染付磁器）
図版17　出土遺物（染付磁器）
図版18　出土遺物（染付磁器）
図版19　出土遺物（染付磁器）
図版20　出土遺物（施釉陶器・土師質土器・白磁・染付磁器・ガラス製品）
図版21　出土遺物（瓦）

表 目 次

第１表　明石城関係略年表 …… 5
第２表　軒丸瓦観察表 …… 19
第３表　出土土器観察表 …… 27

挿　図　目　次

第１図　調査風景 …… 3
第２図　調査風景 …… 3
第３図　調査地遠景（抻櫓から） …… 3
第４図　明石城跡と周辺の遺跡 …… 4
第５図　調査地点図 …… 7
第６図　遺構配置図 …… 8
第７図　土師質焙烙実測図（SK０６） …… 10
第８図　軒平瓦実測図・拓影 …… 19
第９図　瓦実測図（黒色土中） …… 22
第10図　瓦実測図（黒色土中） …… 23
第11図　瓦実測図（黒色土中） …… 24
第12図　瓦実測図（黒色土中） …… 25
第13図　瓦実測図（黒色土中） …… 26
第14図　遺物実測図（SK０１～０６） …… 巻末
第15図　遺物実測図（SK０６～０８・茶褐色土中） …… 〃
第16図　遺物実測図（黒色土中） …… 〃
第17図　遺物実測図（黒色土中） …… 〃
第18図　遺物実測図（黒色土中） …… 〃
第19図　遺物実測図（黒色土中） …… 〃
第20図　遺物実測図（黒色土中） …… 〃
第21図　遺物実測図（黒色土中） …… 〃
第22図　遺物実測図（黒色土中） …… 〃

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経過

明石城は元和４年（1618年）小笠原忠真によって築城され、18代249年間明石藩の居城となった城である。小笠原―松平（戸田）―大久保―松平―本多―松平と城主を変え廃藩置県を迎える。その後、紆余曲折はあったものの明石公園として断続的に現在に至っている。

昭和52年度から県の緑化計画の一環として公園内の植物園化構想が具体化してきた。それに伴う発掘調査を昭和52年度から３ケ年にわたって実施し、多くの成果を挙げた。その成果は、昭和59年３月に刊行された『明石城』に報告しているのでそれに譲るが、艮櫓跡の整備で代表されるように公園の中の明石城としてさらに息吹きを増したものと思われる。

明石城跡は、姫路城・篠山城などと共に近世城郭の代表としての文化財として活用されるばかりでなく、県下最大クラスの公園としても広く利用されており、公園全体の整備も毎年行われている。駅前から大手門を入って本丸へ登城する南北の道は、明石公園のメインロードで最も通行量の多い部分である。しかし雨量が多い場合は雨水が溜まり、歩行者の妨げとなっている。その難を解消するために雨水管布設工事の計画がなされた。道路の東端近くに雨水管を埋設する工事で、掘り方は幅0.5m・深さ１mと小規模なものであるが、長さは200m近くの部分が計画されていた。工事に先立ち、(財)兵庫県公園協会と県教育委員会が協議を行い、昭和60年２月22日確認調査を実施した。３ケ所の試掘壙を設定し調査したところ、２トレンチで土器を埋納した土壙を検出し、１トレンチでも包含層を確認したので、さらに調査を行うこととした。

本調査は、26・27日の両日実施した。２トレンチを中心に南北に包含層の広がりを確認しつつ全面調査を行った。調査に際して(財)兵庫県公園協会斎川正信課長補佐をはじめ職員の方々、㈱二見建設には協力を得た。

雨水管布設工事のため、幅0.5m長さ108.5mの狭長な部分の小面積の調査ではあったが、前回の調査では余り出土しなかった陶磁器類を多数出土しており、明石城の土器から消費地としての流通関係などを考える上に興味深い調査となった。

2．調査の組織

(1)　昭和59年度発掘調査の体制

兵庫県教育委員会が調査主体となり調査を実施した。調査経費は兵庫県公園協会が負担した。

調査事務

社会教育・文化財課	課長	西沢良之
	文化財担当参事	大西章夫
	副課長	森崎理一
	課長補佐	和田富夫
	管理係長	小西清
	埋蔵文化財調査係長	櫃本誠一
	主査	坂本豊明
	技術職員	大平茂
	事務職員	杉本恵子
調査担当	技術職員	大平茂
	〃	渡辺昇
調査補助員	神戸女子大学	岡村真理子
	〃	原香代美
調査協力	兵庫県公園協会	
	二見建設	

(2) 昭和60年度整理調査の体制

調査事務

社会教育・文化財課	課長	北村幸久
	文化財担当参事	森崎理一
	副課長	黒田賢一郎
	課長補佐	和田富夫
	管理係長	小西清
	埋蔵文化財調査係長	櫃本誠一
	主査	坂本豊明
	事務職員	松本豊彦
	技術職員	森内秀造
	〃	加古千恵子

調査担当

社会教育・文化財課	技術職員	岡田章一
	〃	渡辺昇

調査補助員　森岡　みゆき、西上　知予子、岡村　真理子、吉村　幸子、伴　悦子、池田　早恵、池田　紀子、東前　祐子、泉本　さとみ、岡村　句美

3．調査日誌

第１図　調査風景

昭和60年２月22日（金）晴れ

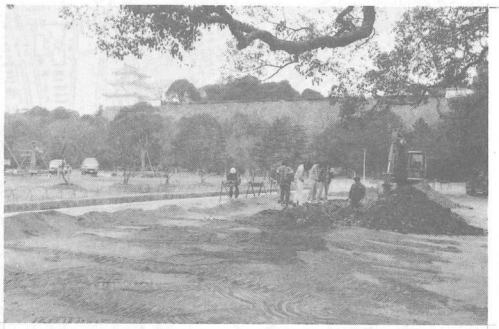
調査打合せ後、雨水管布設予定部分に３ケ所約0.5×４ｍのトレンチを設定。南から１～３トレンチと命名する。２トレンチで土器廃棄土壙を確認し、遺構面の存在を認め、全面調査が必要となる。

２月26日（火）晴れ時々曇り

人通りの多い地域なので、表土掘削を調査工程に合わせて行うこととする。

確認調査を行った２トレンチから南へ重機で掘り下げる。遺構の確認されなかった１トレンチまで調査を実施する。

遺構面直上近くまで撹乱されている個所も多く、上層の堆積は１層だけである。埋土の異なる土壙・落ち込み検出。掘り下げ前の写真撮影後、遺構掘り下げ。土器量はさほど多くない。全体写真撮影。遺構の関連を調べるため埋め戻さずバリケードを張る。

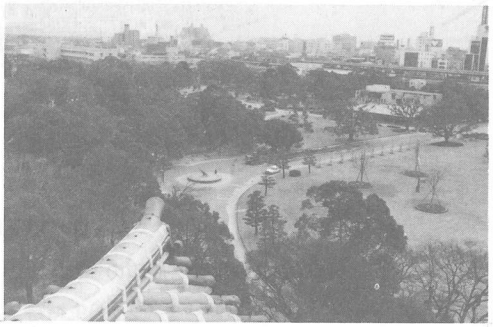


第２図　調査風景

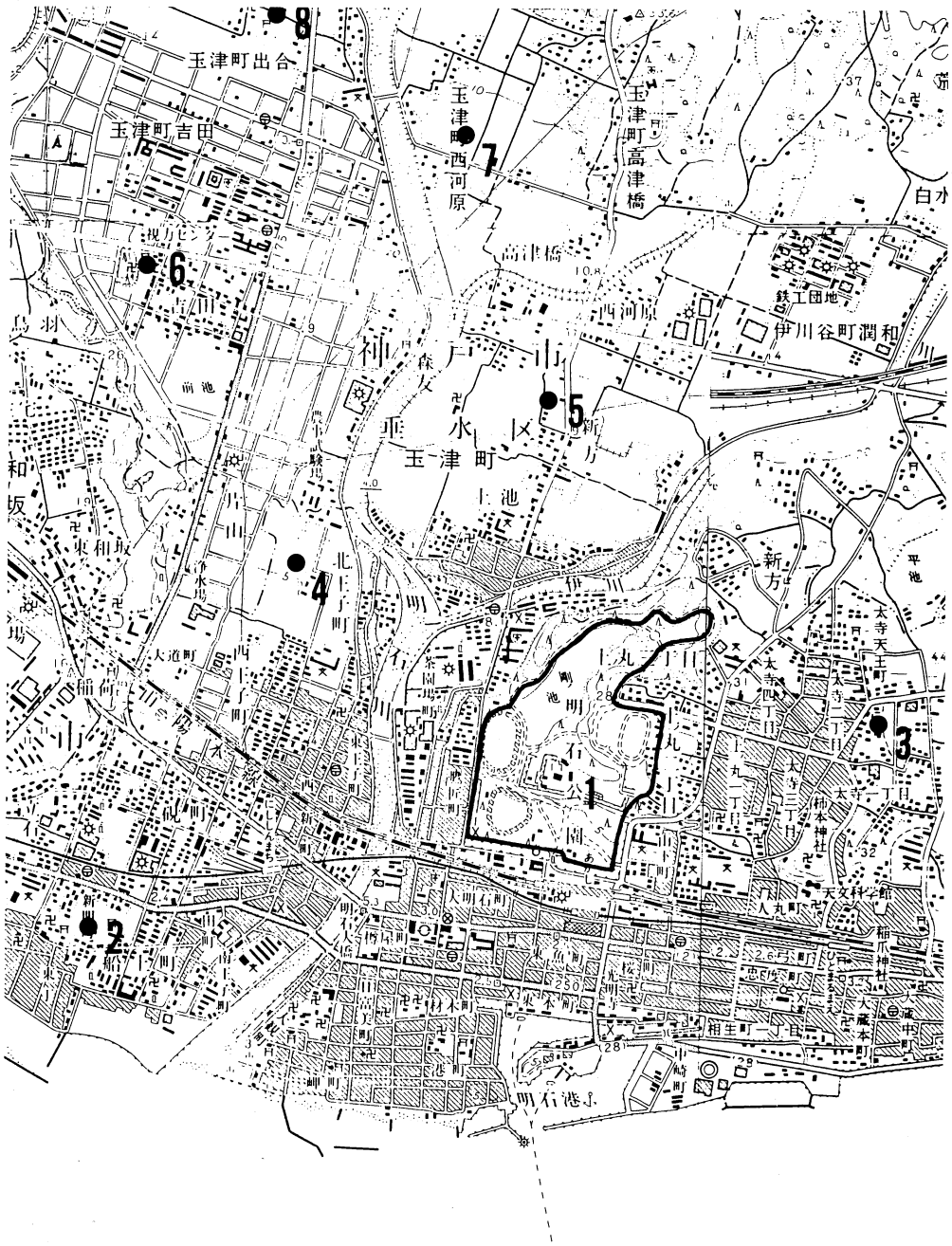
２月27日（水）曇り

昨日の調査部分から重機で北側へ拡張する。10mほど北へ延長したところで地山が現われ、遺構の広がりが認められなかったので、調査範囲を10m拡張でとどめる。昨日と同じ性格の土壙検出。昨日より土器量多く、美濃焼鉢や焙烙も出土。調査地域の全景写真撮影後、実測を行う。その後、部分的に深掘するが、下層の遺構は確認されなかった。

重機を使って埋め戻しを行い、調査終了する。



第３図　調査地遠景（押櫓から）



第４図　明石城跡と周辺の遺跡

明石城跡の位置と周辺の遺跡

1. 明石城跡　2. 船上城跡　3. 太寺廃寺　4. 吉田南遺跡
5. 新方遺跡　6. 枝吉城跡　7. 今津鎌田遺跡　8. 下津橋城跡

第１表　明石城関係略年表

西暦	年号	事　　項		石　高
1617	元和3	7.28.	小笠原忠政（忠真）、信濃国松本（8万石）から入部 明石10万石に封ぜられる。船上城に入る。	10万石 三木郡 3万7千 明石郡 5万 加古郡 4ケ村 3千 加東郡 1万
1618	元和4	3.	将軍秀忠、城改築命ず。 和ケ坂、塩屋、赤松山候補	
		10.	赤松山に決まり築城にかかる。岳父である姫路城主本多美濃守忠政　責任者　普請奉行　村越三右衛門	
1619	元和5	1.19.	御城消失	
		春	三木城など破却	
1620	元和6	4.	楼櫓建築、坤櫓伏見城の建物を賜る。 明石城完成　忠政入城。船上城下から明石城下へ民衆も移す。	
1631	寛永8	1.	夜１０時明石城焼ける	
1632	寛永9	10.2.	小笠原忠政　豊前小倉（１５万石）に転封　直轄地となる。本多忠義・本多政勝　１ケ月交代にて在番	
1633	寛永10	4.9.	松平丹波守康直、信州松本（５万石）から転封	７万石 三木郡 2万 明石郡 5万
1634	寛永11	5.12.	松平康直死去　兄の子光重継ぐ。	
1639	寛永16	2.	松平光重　美濃加納へ転封 大久保加賀守季任が加納（５万石）から転封	７万石
1649	慶安2	7.4.	大久保季任、肥前唐津（７万石）に転封	
		8.26.	松平山城守忠国が丹波篠山から転封	７万石
1679	延宝7	10.	松平日向守信之、大和郡山（８万石）へ転封	
		11.21.	本多出雲守政利、大和郡山から転封	６万石 明石郡 5万 三木郡 1万
1682	天和2	2.23.	本多政利、家事不正のため奥州若瀬（１万石）に転封	
		3.16.	松平若狭守直明、越前大野（５万石）から転封	６万石
1700	元禄13	8.	天守石垣を改築　工費　銀２７貫８００匁	
1702	元禄15	4.	直明、隠居となり二の丸屋敷に移る。	
1739	元文4	6.	明石城櫓の修復が実施される。	
1743	寛保3	2.11.	二の丸の普請の棟上げ	
1810	天保11	3.26.	松平兵部大輔斉宜　家督を継ぐ。（将軍家斉２５男）	８万石 （格式10万石）
1867	慶応3	10.	版籍奉還	
1871	明治4	7.	廃藩置県 入札により一般に払い下げ 二の丸御殿跡に有文中学校置かれる（１年で廃校）	

『明石市史』『明石城』『史話明石城』から作成

Ⅱ. 調査結果

今回の明石城跡の発掘調査は、雨水管布設工事という事業のため調査面積も狭く、さらに幅が０．８ｍと非常に狭長な地域を調査対象とした。そのため十分な調査は出来なかったが、昭和５２～５４年度に都市緑化植物園整備工事に先立って行われた調査では、出土遺物は瓦が大半で陶磁器の出土量は少なかったのに比べ、今回の調査では多量の陶磁器を出土したことは大きな成果であった。

調査地は、大手門から本丸へ通じる主要道で、正保地図をはじめとする古記録でも居屋舗郭東の道に相当するものと思われ、城として機能していた時期は道であったはずである。

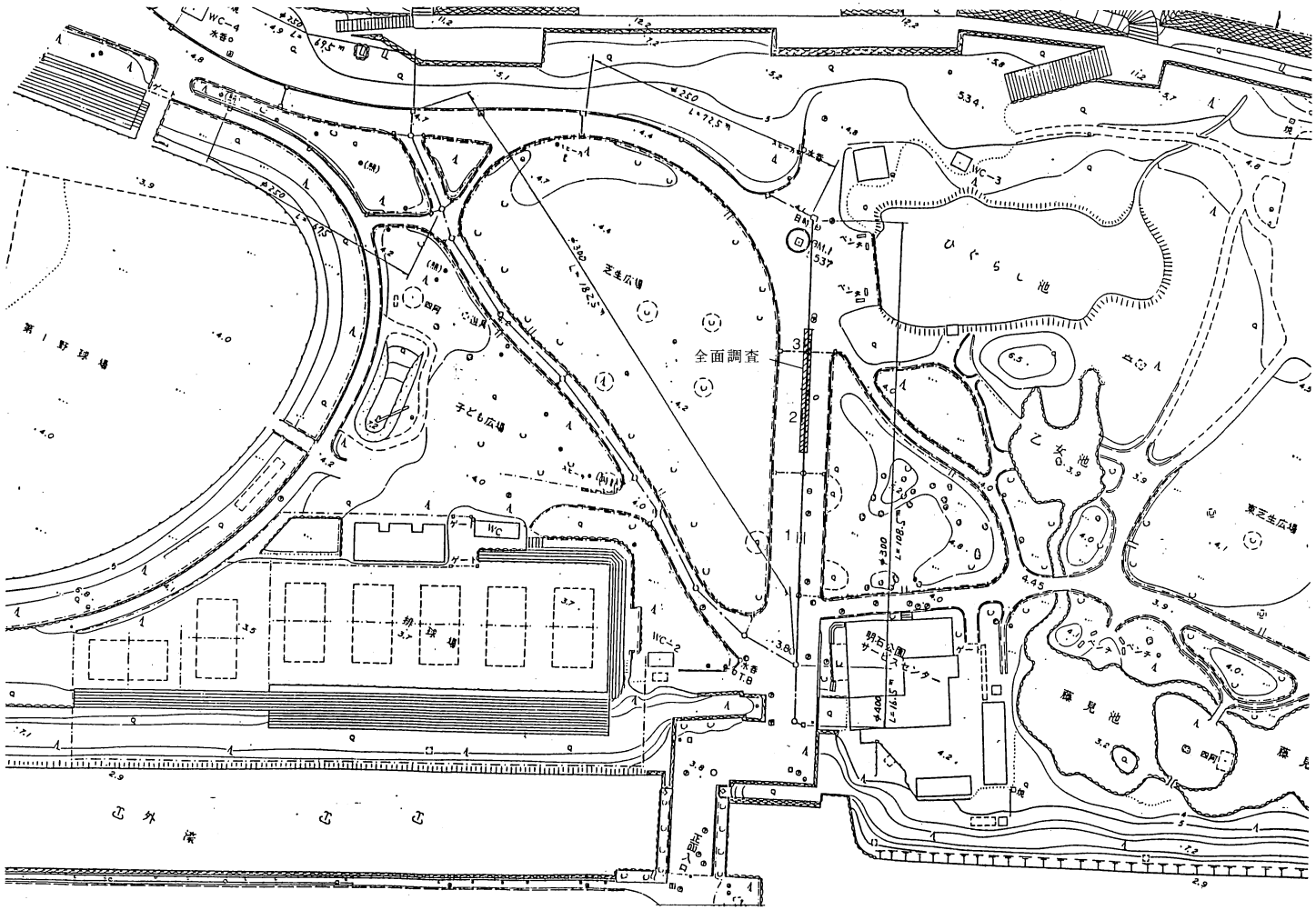
工事計画は、108.5mの長さに雨水管を埋設するもので、調査もそのため自ずと制約を受けた上に、当地が明治以後盛んに利用された地区ゆえに多くの撹乱が見られた。南側•北側とも両端は遺構が残存していなかった。その結果、中央部分約33mを0.8m幅で調査を実施した。

遺構面は複数あるかと思われるが、面としては1面しか確認できなかった。ただ、埋土が異なっていることから時期差はあるかもしれない。遺構は、第５図のように9基の土壙•落ち込みを検出した。調査幅が狭いため遺構の性格を決することは当然のこと、名称さえも与えると過ちを犯す可能性が高いので、遺構番号を（SK01など）与えるにとどめる。SK09のように溝と思われるが、今報告では同様の扱いをしておく。

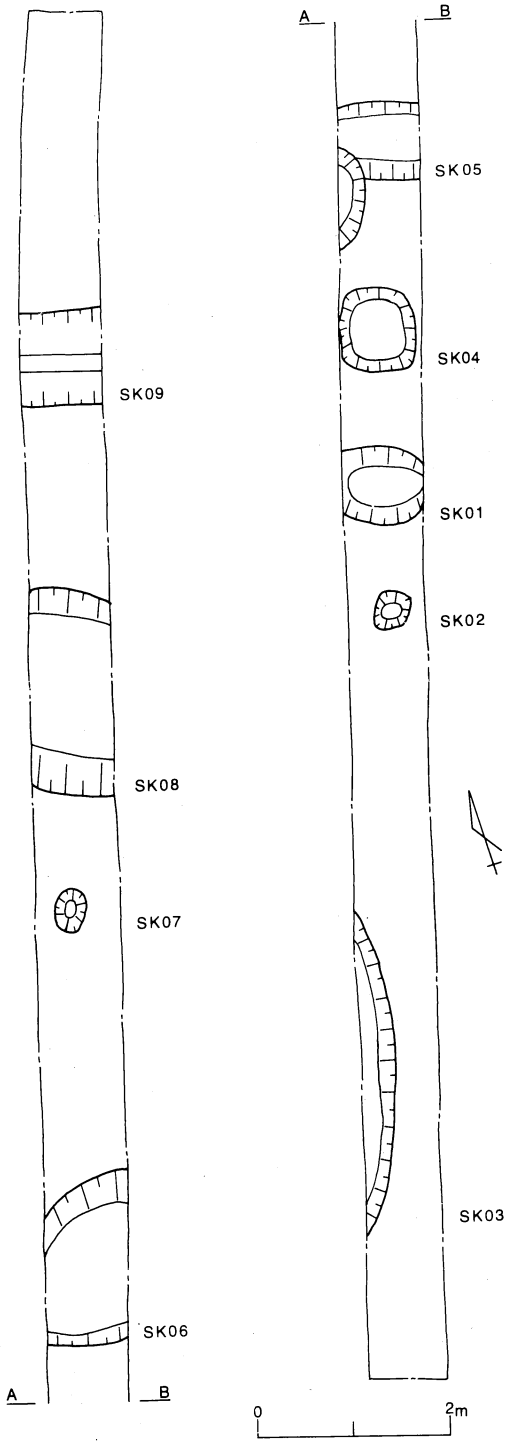
SK01　短径83cmの楕円形に近い形状を示す。長径は120cm前後かと思われ、深さは30cmを測る。埋土は灰褐色砂質土で、出土遺物には、備前系擂鉢、西播系陶器埦、土瓶、東山系碗、肥前系くらわんか手碗・蓋、瀬戸・美濃系灯火具などがある。

SK02　短径30cm、長径40cmの不定形の小形の土壙で遺物は含まない。埋土は、暗灰色粘質土である。

SK03　残存長340cmを測る落ち込みで、弧状の一部を検出したにすぎない。現状では深さ25cmを測り、緩やかに西側へ落ちている。埋土は暗灰色粘土質であるが、SK02の埋土と比べると粘性が強く、やや青味がかかる。規模が大きいわりに緩やかに落ち込むことやヘドロ層に近い埋土から考えて、自然地形への堆積と思われる。出土遺物も小片を数点含むだけである。SK03の北端肩部で焼土と共に焼けた瓦が出土している。遺構とは考えられず、偶然堆積した


全面調査
1
2
3
第1野球場
子ども広場
芝生広場
ひろし池
乙女池
東芝生広場
藤見池
明石公園センター
WC
WC-1
WC-2
WC-3
WC-4
534.
537

第5図　調査地点図



第6図　遺構配置図

ものであろう。ここから南へは遺構面である黄色土も見られず、遺構は存在しない。上層も北側から僅かに下がっており、低かったことを示している。

SK04　最大径90cmの隅円方形に近い形状の土壙で、深さ32cmで埋土は暗灰色粘質土である。

SK05　灰褐色砂質土を埋土とする最大長90cmの深さ20cm足らずの擂鉢状の浅い土壙と幅80cm・深さ17cmの浅い溝状の落ち込みが切り合っている。土壙の方が新しく、溝を切っており、溝の埋土も暗灰色土で土層の新旧関係も予盾しない。しかし共にほとんど遺物は含まず、時期決定できる土器は出土していない。

SK06　今回の調査地内で最も遺物の出土量の多い土壙で、遺物廃棄土壙と呼ぶにふさわしい遺構である。最大長180cmを現状で測るが、250cm〜300cmの楕円形の土壙になろうと思われる。西側は下端が確認されているので、西端は押えられている。深さ40cmの土壙で、埋土は灰褐色砂層である。美濃鉢や焙烙をはじめ多数の土器と瓦を含んでいた。他に焼土を含んでいたのが特徴的で、南の肩部周辺にも焼土と焼けた瓦が確認されている。出土遺物には美濃系灰釉鉢、西播系陶器椀、丹波系擂鉢、染付磁器碗、土師質火消壺などがある。

SK07　長径40cm、短径30cmの楕円形の小形の暗灰色土を埋土とする土壙で、深さは25cmである。

SK08　残存する最大長で220cmを測る大形の落ち込みで、深さ35cmを測る。大形の落ち込みのわりに遺物量は少ない。埋土は暗灰色土。出土遺物には染付磁器皿などがある。

SK09　現代のコンクリート製土管が埋設されており、その掘り方であろうと思われる。ただ、若干の遺物は含んでいる。

Ⅲ　出土遺物

1．土器

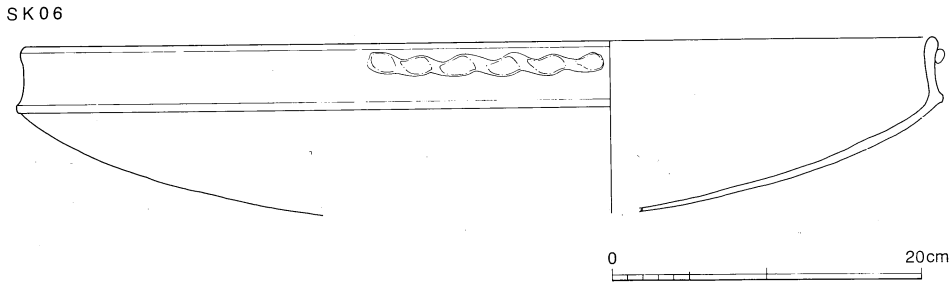
遺構の項で 述べたように、今回の調査は、雨水管敷設に伴うものであり調査対象も幅0.8m、長さ33mと非常に狭長な限定されたものとなっている。また検出された遺構も、その一部が検出されたにすぎず、性格については不明な点が多い。さらに、遺物の大部分は遺構検出面の上層に堆積する黒色土から出土しており、確実に遺構に伴うものは極く一部にすぎない。

したがって、ここでは通常中・近世の資料を取り扱うに際して用いられている方法すなわち遺構に伴う一括出土品を基礎資料とし、遺構の重複関係及び遺物のセット関係から遺物の編年的考察を行うという方法は事実上とりえない。そのような理由から、今回は出土資料を土師質土器、瓦質土器などの種別にとり上げ、現在知られている範囲内で、若干の解説を加えるにとどめたい。

前回すなわち昭和52年度から54年度に行われた調査では、瓦の出土が多量にみられ、焼物類の出土は極く少量に過ぎなかった。[文献 1]

それに反して、今回の調査では、出土遺物の大部分は焼物類が占め、他に若干の瓦類及びガラス製品が出土しているに過ぎない。

出土した焼物類には土師質土器、瓦質土器、無釉陶器、施釉陶器、磁器などが含まれ、その内訳は以下の通りである。ここでは下記の順に記述を進めることにする。



第７回　土師質焙烙実測図（ＳＫ０６）

- 焼物
  - 土器
    - 土師質土器—皿、焙烙、焜炉、火消壷
    - 瓦質土器—火舎、羽釜
  - 陶器
    - 無釉陶器
      - 備前系—擂鉢、鉢、匣鉢
      - 産地不明—蓋
    - 施釉陶器
      - 西播系—蓋、堝、鉢、椀
      - 丹波系—甕、壺、鉢、植木鉢、小鉢、椀
      - 京焼系—椀、蓋
      - 瀬戸・美濃系—蓋、壺、鉢、火舎、油指
      - その他の施釉陶器—壺、灯火具、甕、鉢、蓋
  - 磁器
    - 白磁—皿
    - 染付磁器
      - 肥前系
      - 東山系
      - その他の染付磁器

（1）**土師質土器**

土師質土器は量的には非常に少なく、小皿、焙烙、焜炉、火消壷などがある。

小皿　小皿は、平底でヨコナデ調整を加えるもの（第14図　SK01—1）が一点出土している。

焙烙　直立する短い体部をもち底部がやや突出するもの（第15図　SK06—6、第16図　5）と大型で体部に二ケ所粘土紐を貼り付け指押えするもの（第7図）がある。

火消壷　SK06出土のもので口縁部は水平に折り曲げ、外面には煤の付着が見られる(第14図　SK06—1)。

（2）**瓦質土器**

瓦質土器には火舎、羽釜がある。

火舎　第16図　2は長方形の火舎の口縁部である。内・外面ともナデ調整を加える。

羽釜　第16図　7は羽釜である。体部は内彎し、口縁部は内傾気味に立ち上がる。体部内面をナデ、体部外面をロクロケズリした後、ツバを貼り付け、接着部をヨコナデする。さらに体部内・面にロクロナデ調整を施し、口縁部からツバの下面までロクロを回転しながらミガキ調整を加える。

（3）**無釉陶器**

無釉陶器は蓋以外全て広義の備前系のものと思われ、丹波系のものは含まれない。[2]

備前系陶器

備前系陶器には鉢、擂鉢、匣鉢などがある。

鉢　第17図　3、4は口縁部が肥厚する鉢である。外面はロクロケズリの後ロクロナデ、内面にはロクロナデ調整を加える。

擂鉢　擂鉢は5点出土しているが、口縁部まで残存しているものは内3点（第14図　SK01—13、第15図　8、第17図　2）である。いずれも口縁部外面に2条の凹線を施し、内・外面はロクロケズリの後ロクロナデ調整を加え、底部外面は未調整で砂が付着する。内面の擂目は9条を1単位とするもの（第16図　10)、11条を単位とするもの（第16図　8、9）12条1単位のもの（第17図　2）とがある。

匣鉢　第16図　1は平底で体部が直立する小型の鉢形土器である。建水あるいは匣鉢として使用されたものと考えられる。

その他の無釉陶器　第17図　5は周縁部に1条の沈線を施す蓋である。上面に穿孔されているところから恐らく急須の蓋であろうと思われる。内・外面とも施釉されておらず、外面に化粧土が塗布されている。

（4）施釉陶器

施釉陶器は図化したものだけで45点を数え、染付磁器と並んで、今回出土した遺物の中では大きな比重を占める。

産地別では西播系[3]、丹波系、京焼系[4]、瀬戸・美濃系[5]のものが含まれる。

①西播系陶器

西播系陶器には蓋、堝、埦、小鉢などがある。

蓋　蓋は、大別して口縁を水平に外反させるもの（Ⅰ類）とそうでないもの（Ⅱ類）とがある。蓋Ⅰ類は、基本的には外面はロクロナデ、ロクロケズリの後トビガンナによる施文を行ない、さらに鉄釉を施釉し、最終的に白泥による施文いわゆるイッチン掛け[7]を行なっている。施釉方法から見ると、Ⅰ類はさらにトビカンナの施文部分を含めて全面に施釉するもの（Ⅰ—A類　第17図 12、14）トビガンナの施文部分は施釉せず、それ以外の部分を輪状に釉掛けするもの（Ⅰ—B類　第17図　11、13　第18図　1〜3）とに分類される。焼成、胎土の点から観察すると、前者は比較的堅緻に焼成され胎土は灰色ないしは暗灰色を呈するのに対し、後者はやや軟質に焼成され、胎土は淡灰色ないしは淡黄褐色を呈する。[8]

堝　堝は口縁部の形態から、口縁部をつまみあげるもの（Ⅰ類）と口縁部を折り曲げ玉縁状に肥厚させるもの（Ⅱ類　第17図　7）とに大別される。

堝Ⅰ類は把手の形態から体部上部に棒状の把手を有するいわゆる行平型の堝[9]（Ⅰ—A類）と口縁部上面に管状の把手を有するもの（Ⅰ—B類）とに分類される。Ⅰ—A類はさらに外面の

施文方法からトビガンナで施文し鉄釉掛けするもの（Ⅰ—Aa類　第18図　4〜8）と露胎で一部白濁釉で施文するもの（Ⅰ—Ab類　第17図　9）とに分けられる。

Ⅰ—Aa類には蓋と同じく、硬質に焼成され胎土が灰色ないしは暗灰色を呈するもの（第18図　5、8）、やや軟質に焼成され胎土が淡黄褐色を呈するもの（第18図　6、7）とがある。

椀　椀には内・外面とも灰釉を施し、さらに白泥でイッチン掛を行うもの（第17図　8）が1点出土している。

小鉢　第18図　12は内・外面に灰釉を施す小鉢である。底部外面は露胎となっている。

②丹波系陶器

丹波系施釉陶器には、壺、鉢、植木鉢、椀などがある。

壺　壺には内・外面に鉄釉を施し、外面に黒釉を飴状に施釉するもの（第18図　10）と内面に鉄釉、外面には白色の化粧土を施し透明釉を施釉するもの（第18図　13）とがある。

鉢　鉢には口縁部外面に3条の凹線を施し、内・外面とも褐釉を施釉するものがある（第18図　14）。

植木鉢　第18図　15は植木鉢と思われ、底部に穿孔が見られる。内・外面とも鉄釉を施釉するが、高台部以下は露胎で4ケ所の抉りが見られる。

椀　第16図　11は内面を白濁釉で施釉し、外面は白濁釉と灰釉で施文した椀で、施文部以外は露胎である。露胎部は淡赤褐色を呈する。

③京焼系陶器

京焼系陶器には、蓋、椀がある。

蓋　蓋には呉須及び鉄釉で外面に松葉文を描くもの（第19図　3）、鉄釉で施文したのち5ケ所にたんぱん[(10)]を施し、白濁釉を掛けるもの（第19図　4）、菊花文を貼り付け透明釉を施すもの（第19図　5）などがある。

椀　椀には口縁部が外反し、全面に透明釉を施し淡黄灰色に発色するもの（第19図　1）及び高台部以外は全面に灰釉を施し、鉄釉の細かい斑点が見られるもの（第19図　2)などがある。

④瀬戸・美濃系陶器

瀬戸・美濃系陶器には、鉢・ 火舎・油指がある。

鉢　第15図　SK06—8は美濃系の灰釉鉢である。口縁部は外反させ体部には2条の凹線を施す。内・外面とも灰釉を施すが高台脇以下は露胎でやや幅の広い低い高台をもつ。底部内面には6ケ所の目跡が認められる。この資料は、他のものと相違し、16世紀後半から17世紀前半の時期が考えられる。[文献 6]

火舎　第19図　12は火舎の口縁部である。白濁釉の上から青色釉を2重掛けしており、口縁部内面では両釉のにじみが見られる。

油指　第19図　6は注口をもち白色の化粧土を塗布したのち透明釉を施す油指である。外面

には細かい貫入が入る。

⑤その他の施釉陶器

施釉陶器には上述したものの他に、甕、壺、灯火具、蓋、鉢などが見られるが、いずれも現在の所、産地は同定出来ない。

甕　甕は2点出土している（第19図　13、19）。いずれも鉄釉を施釉するが、第19図　13はやや釉調がガラス質を呈する。両者とも明治以降の時期が考えられる。

壺　内面露胎で、外面に化粧土を施し、透明釉を施釉するもの（第19図　15、16）と鉄釉で施文するもの（第19図　10）がある。

灯火具　灯火具には、内・外面とも鉄釉を施すひょうそく（第19図　17）がある。

蓋　蓋には、内・外面とも白濁釉を施すもの（第19図　11）、禾目状に施文した後、鉄釉を施釉するもの（第20図　1）、内面灰釉、外面鉄釉施釉の後、白濁釉、緑釉、青色釉で花文を施文するものなどがある（第20図　2）。

鉢　第19図　9は内・外面とも鉄釉を施釉する鉢で、高台脇以外は露胎である。

(5)磁器

磁器には白磁、染付磁器、色絵磁器が含まれるが、白磁、色絵磁器は各々一点ずつで、大部分は染付磁器である。

①白磁

第20図　3は白磁の皿である。内・外面とも菊皿風に成形し、蛇ノ目凹形高台[11]をもつ。

②染付磁器

染付磁器には、肥前系、東山系のものの他、産地不明のものが含まれる。

肥前系染付磁器

肥前系染付磁器には、碗、皿、鉢、蓋、猪口がある。

碗　碗には厚手に成形され、発色の悪い呉須で文様を描くいわゆるくらわんか手と称されるものと薄手に成形され、外面に細かい草花文を描くもの（第20図　11）とがある。くわらんか手のものには、丸文を描くもの（第14図　SK01—10、11）、花文を描くもの（第20図　14）、格子状文を描くもの（第20図　15）、梅花文を描くもの（第21図　1）、草花文を描くものなどがある（第21図　2）。

皿　皿にも、碗同様くらわんか手に属するものには、底部内面に蛇ノ目釉ハギ[12]の見られるもの（第20図　4〜7）がある。又くらわんか手のもの以外には、口縁部を輪花状に成形し蛇ノ目凹形高台をもつもの（第21図　4、5）、同様に輪花状の口縁をもつが高台が輪高台のもの（第21図　3）、外面唐草文、内面には松竹梅文を書き、高台裏に「大明成化年製」の銘をもつもの（第21図　6）などがある。

鉢　鉢には、外面は唐草文、内面には細かい草花文を描くもの（第20図　12）と、口縁部を

多角形状に成形し、内面に斜格子文或は花文を描くもの（第15図　茶褐色土中―4、5）がある。

蓋　蓋には外面に草花文を描くもの（第22図　1）、丸文を描くもの（第22図　2）、亀甲文と松竹梅文を描くもの（第22図　6）などがある。

猪口　猪口には、体部が直立し外面に幾何学文、内面に斜格子文を描くもの（第15図　茶褐色土中―3）がある。

東山系染付磁器

東山系染付磁器には、碗、急須がある。

碗　第14図　SK01―12は、口縁部を外反させ、外面に濃い藍色の呉須で、花文を描く碗である。

急須　口縁部を垂直につまみあげ、外面に呉須で雷文帯、松、人物図を描くものである（第22図　13）。

その他の染付磁器

上記以外にも本遺跡から出土した染付磁器には、碗（第14図　SK03―１、SK06―５.第22図　４、５、７、８）、皿（第15図　SK08―１、茶褐色土中―６）、合子（第22図　11）、蓋（第22図　12）、植木鉢（第22図　14）などがあるが、産地については現在の所、不明である。

⑹**小結**（遺物の年代幅について）

先に述べた様に今回の調査で出土した資料は、遺構に伴うものは極く少量で、大部分は遺構面の上層に堆積した黒色土中から出土している。また検出された遺構も、調査面積が制約されていることなどの理由から、その性格は殆ど不明である。このような出土状態のあまり明確でない資料について、ある程度の年代を与えるには、他の遺跡の出土品ないしは伝世品の中に類品を見出し、そこで与えられている年代をあてはめるという方法をとらざるを得ない。しかし近世遺跡の調査例は消費地、生産地とも近年徐々に増加する傾向にある[13]が、その研究は未だ緒についたばかりであり、出土遺物に関しては、産地の同定・時期の決定ともまだ充分に解明出来るような状況には至っていない。生産地に関しては、肥前、瀬戸・美濃、京焼などの大生産地に加えて、江戸時代後半になると各地に中小の生産地が勃興する。例えば、兵庫県下でも江戸時代後半から幕末にかけて、三田、王地山、舞子、朝霧、明石、野田、古池、入野、出石などの諸窯が生産を開始する。

しかし、これらの諸窯は一部を除き殆ど調査が行われておらず、その実態は現在の所殆ど不明である[14]。このような状況下で、今回の出土資料を厳密に産地同定し、時期を考えるということは非常に困難な作業であり、現在の所は不可能である。ただ、16世紀後半に操業を開始し、近世を通じて磁器生産の中心地であった肥前系諸窯の産品については、従来より、かなり解明されており、1984年には大橋康二氏によって、それらを集成する形で、編年案[文献14]が発表されている。ここでは、本遺跡の出土資料中より大橋氏の編年案に掲載されているものと同様の特徴を

有するものを肥前系磁器と認定し、その年代について大橋氏の説に従って述べてみたい。

本遺跡で出土した肥前系磁器には、厚手に成形され、発色の悪い呉須で施文されたいわゆるくらわんか手と俗称される碗、皿類がある。これらくらわんか手の碗、皿類は18世紀を中心に波佐見地方などで大量に生産されている。又、碗には別に薄手に成形され外面に細かい草花文を描くものがあるが、これは大橋編年によれば19世紀代に編年されている。

皿類では、くわらんか手以外に高台裏に「大明成化年製」の銘をもつものがあるが、高台裏に銘をもつ皿は17世紀後半に出現し、18世紀代にも行なわれている。

皿類では他に口縁部を輪花状に成形し、蛇ノ目凹形高台をもつものがあるが、これには19世紀代の時期が与えられている。

他に口縁部を多角形状に成形する鉢も同様に19世紀代に入るものと考えられる。

これらを総合して考えると本遺跡出土の肥前系陶磁器は、大まかに言って18世紀から19世紀にかけての近世後半の時期が与えられるものと考えられる。

以上、肥前系磁器をとり上げ碗、皿類を中心に、若干年代について触れたが、日常雑器には他に堝、釜、蓋、擂鉢などがある。そこで次にこれらの中から、ある程度形式分類を試みた堝、蓋類をとりあげ、若干補足することにする。本遺跡からは多量の堝、蓋類が出土しているが、それらの大部分は広義の京焼系陶器の範疇に属するものである。

肥前系磁器から与えられる18世紀から19世紀の時期は中小窯の開窯時期に当たり、県下の各地でも先に記した様に中小窯の操業が始められる。その一つに西播系諸窯があるが、ここで西播系と称したものには、入野、古池、野田等の諸窯が含まれている。これらはいずれも京焼の影響あるいは京焼の陶工の指導の下に開窯したもので、広義の京焼系陶器を生産している。

西播系陶器については、森内秀造氏によって窯跡での遺物採集が行なわれ、その成果は相生市史の中にまとめられている。[文献 15]

先に遺物の項で西播系陶器と分類した堝、蓋類は、採集資料及び森内氏の論文に依って、形態、施釉・施文の方法などの点から見て類似するものを抽出したものである。森内氏によれば、西播系諸窯とくに、入野、古池窯については、文献の記載から開窯時期が文化年間すなわち１９世紀前半におかれている。このことから、本遺跡出土の西播系陶器については１９世紀前半以降の時期が考えられる。

以上、碗、皿、堝、蓋などの日常雑器について、肥前系、西播系のものを中心に時期を考えてきたが、出土遺物全体について考えてみると、これらの遺物は厳密な意味での一括性は認められないものの、同一の包含層中よりの出土という緩い一括性を前提として考えると、１７世紀前半の時期が考えられる美濃系灰釉鉢を除いては、ほぼ１８世紀から１９世紀代にかけての時期を与えることが出来よう。

最後に、さらに細かい時期決定を行うには、生産地での資料の増加もさることながら、消費

地における厳密な一括性をもつ資料の増加が必要であることは言うまでもない。 今後の消費地における資料の増加をまちたい。

注

1. ここでは、瓦質土器を広義の「土器」の概念に含めている。

2. 近世後半の時期の備前系あるいは丹波系の擂鉢については、現在のところ厳密に区別することは不可能である。ここでは厚手で比較的軟質に焼成されたものを備前系、薄手で、比較的硬質に焼成されたものを丹波系として一応分類[文献2]し、今回の出土資料については広義の備前系に含まれるものとした。

3. 西播系陶器という言葉は現在殆ど使われていない。ここでは、１９世紀以降、京焼の影響のもとに操業を開始する野田、入野、古池、相生などの諸窯で生産されたと思われる陶器類を一応西播系陶器と仮称している。

4. ここには、西播系陶器類は含まれない。

5. 動坂遺跡[文献3]、白山四丁目遺跡[文献4]の報文中に瀬戸・美濃系陶器と報告されているものと器形、釉調などの点で類似するものを抽出して一応瀬戸・美濃系陶器と分類した。

6. 「轆轤に器物を据えて削りを入れる場合、箆の当たる角度が大きくなると、箆は轆轤の回転に撥ね上げられて肌に手斧をかけたような削り目が付くことがある。これを躍り箆または飛びがんなという[文献5.PP１４５]。」

7. イッチンとは描用具の一種[文献5.PP６３]である種である。

8. 森内秀造氏から前者は古池窯、後者は入野窯での採集品に類品が多いとの教示を得た。

9. 出土資料中には把手部が残存するものがなく図示出来なかったが、類品との比較から全て棒状の把手を有するものと考えられる。

10. たんぱんとは「硫酸第二銅（$CaSO_4 5H_2O$）のことを言い、銅を釉成分に少量加えたい時に用いられる[文献5.PP６０６]。」

11. 「高台中央部を円く削り込み、その周囲の釉を蛇ノ目状に剝いだ作りの高台[文献7.PP１７１]」

12. 「焼成時に皿類を重ね積みする方法の一つ。皿の見込の上釉を蛇ノ目状に剝ぎ、そこの上の製品の高台が当たるようにする[文献7.PP１７１]。」

13. 例えば兵庫県下でも姫路城[文献8]、明石城、赤穂城[文献9.１０]、三田城[文献11]などで調査が行われている。

14. 三田青磁窯跡は1971年兵庫県教育委員会によって、又豊岡市高屋窯[文献12]は１９７９年豊岡市教育委員会の手によって調査されている。

15. 相生市史第２巻は現在まだ刊行されていないが、ここでは森内氏の御好意により、その草稿を参照させて頂いた。

参考・引用文献

1. 松下勝 他　１９８４　『明石城』（兵庫県文化財調査報告　第２４冊）神戸　兵庫県教育委員会

2. 岡崎正雄 他　１９７６　「安富中学校前東遺跡」『中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（宍

粟郡編）』 神戸　兵庫県教育委員会
3.佐々木達夫 他　１９７８　「文京区　動坂遺跡」 東京　動坂貝塚調査会
4.滝口宏 他　１９８１　「白山四丁目遺跡」 東京　白山四丁目遺跡調査会
5.加藤唐九郎　１９７６　『原色陶器大事典』pp１４５　京都　淡交社
6.楢崎彰一他　１９７６　『美濃の古陶』 京都　光琳出版
7.大橋康二　１９８４　「用語解説」pp１７１『北海道から九州まで国内出土の肥前陶磁』 佐賀　佐賀県立九州陶磁文化館
8.朽木史郎、長谷川真、岡田章一　１９８５　『特別史跡姫路城跡―兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告』 姫路　兵庫県立歴史博物館
9.鈴木充他　１９８４　「史跡赤穂城跡本丸発掘調査報告書Ⅰ」『赤穂市文化財調査報告書1』 赤穂　赤穂市教育委員会
10.鈴木充他　１９８４　「史跡赤穂城跡本丸発掘調査報告書Ⅱ」『赤穂市文化財調査報告書５』 赤穂　赤穂市教育委員会
11.岡田章一　１９８５　「三田陣屋内出土の一石五輪塔積井戸」『兵庫県埋蔵文化財発掘調査年報－昭和５７年度』 神戸　兵庫県教育委員会
12.瀬戸谷皓他　１９８１　『但馬・高屋古窯』（豊岡市文化財調査報告第１１集） 豊岡　豊岡市教育委員会
13.佐々木達夫他　１９７８　「肥前磁器古窯と出土品」『世界陶磁全集８』 東京　小学館
14.大橋康二　１９８４　『肥前陶磁の変遷と出土分布－発掘資料を中心として－」『北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁』 佐賀　佐賀県立九州陶磁文化館
15.森内秀造　１９８６年刊行予定　「相生の近世窯業」『相生市史第２巻』 相生　相生市史編纂室

2. 瓦

今回の調査で出土した瓦はコンテナ8箱分と量的には少ないが、軒丸•軒平瓦をはじめ桟瓦•熨斗瓦•海鼠瓦等多くの種類がみられた。以下各種について記述をすすめる。

軒丸瓦　　（第9図　1〜7）

軒丸瓦は第3表に示すように9点が出土している。

図版番号	瓦当径	文様	丸瓦部	胎　土	焼　成
1	13.3	三葉葵	Ⅲ	粘土質	銀化現象呈す
2	14.8	剣酢剣	Ⅱ	やや砂質	須恵質に似る
3	(13.2)	〃	—	粘土質	やや軟、燻瓦
4	13.3	山字	Ⅲ	粘土質	銀化現象呈す
5	(13.2)	〃	Ⅲ	粘土質	銀化現象呈す
6	13.4	三ツ巴	—	粘土質	黒色、燻瓦
7	13.5	〃	Ⅲ	粘土質	黒色、燻瓦
a	(13.3)	剣酢漿	Ⅱ	砂質	軟質、燻瓦
b	(13.5)	三ツ巴	—	粘土質	黒色、燻瓦

第２表　軒丸瓦観察表

瓦当面（　）は復原径、図版番号のａ、ｂは小破片のため図化しなかった2点について仮に付したものである。

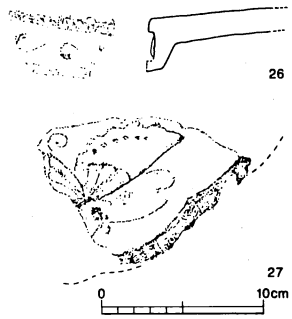
また瓦当と丸瓦部の接合は観察可能であった5点は全て芋付け[1]で瓦当裏面上半は櫛による孤状の刻み目が認められた。なお2の丸瓦部裏面には横方向のコビキ痕が認められた。

丸瓦　　（第10図、第11図　10〜14）

出土量は平瓦に次いで多いが全て破片で全長の判る資料はなかった。玉縁部を残すものは12点あったが、玉縁は全て短く2.5cm〜3.1cmの範囲に納まり、取り付き角度は急である。これらの玉縁の凹面は全て布袋目を残しており、筒部の形状により以下の3種類の分類を試みた。

Ⅰ：筒部凹面は布目のみで、凸面は巾1.5cm内外のヘラナデを施す。側面は2方向から面取りされ、凹面側の面取りは幅広く急角度を持つ。

Ⅱ：筒部凹面は素地より粘土板を切り取る際の横筋[2]を残す。凸面は縦方向のヘラナデを施す。側面は凹面側に巾広く面取りされ断面形は鋭角状である。赤橙色で軟質の焼成のものもいくらかみられる。胎土は若干の砂を含んでいる。



第８図　軒平瓦実測図・拓影

Ⅲ：筒部凹面は縦方向の叩き板調整痕を残す。凸面は丁寧にみがかれる。側面は面取りされるが断面形は丸みをもっている。焼成は堅く、銀化現象を呈したものも多い。胎土は粘土質で断面は灰白色である。

なおⅡとⅢについては凹面頭側のケズリの観察ができたものがいくつかあったが、Ⅱのものよりは Ⅲのものより幅広くケズリを施す傾向がみられるようである。Ⅰ.Ⅱも燻瓦であるが、銀化現象を呈するものはなかった。頭幅知れた2点は11.2cmと11.6cmでいずれもⅢ、また尻巾の知れる8点のうちⅢに属する7点は12.3cm〜12.7cmの範囲内であった。第10図　12はⅠに属し尻巾14.6cmを測る。胎土は若干砂を含み焼成はやや軟かく、直径1.5cmの釘穴を凸面より穿ち、凹面には紐痕を残す。13はⅡに分類できる。14は凸面は縦方向のヘラナデ、凹面は細かな布目の上にナデを施し、紐痕を残す。10は2つ並んだ釘穴の位置で欠損している。10•11はいずれもⅠに分類される。

軒平瓦　（第8図　26、27　第9図　8）

4点が出土したが、全長および幅の知れるものはなかった。文様の観察できたものは3点であったが、第7図　26は灰白色を呈し、表面は燻されておらず唐草文様も他の2点と比べてややリアルで、瓦当で文様の占める割合も広い。平瓦部凹面は風化が著しい。他はいずれも燻瓦で黒銀色を呈す。製作技法では4点とも平瓦部凸面先端に櫛で刻み目を入れ瓦当の下半を接合している。また平瓦部凸面の観察可能であった2点については、ハナレ砂の使用の認められるもの、認められないもの各1点であった。8は側面から中心までが残っているが、瓦当全体の中で文様の占める幅は約50%である。第8図　27は揚羽蝶文様の軒平瓦であるが、他と異なり赤橙色を呈し、焼成は堅緻である。厚みは最も厚いところで3.2cmを測る。

平瓦　（第11図　15、16）

出土量は重量にして瓦全体の42%と多いが、幅および全長を知り得るものは見出せなかった。黒色の燻焼ないしは銀化のみられるものとやや軟質のものがあるが、軟質のものは10%にみたない。凸面には全てハナレ砂の使用が認められ、また凹面、側面は非常に丁寧にみがかれている。端面を残す破片は32点出土しているが、立て並べて乾燥する際の砂が付着するものと磨かれるもの、各々16点であった。これらの3面と凹面のなす稜は面取りされて丸味をもつが凸面の四周の稜は面取りされず鋭い稜線になる。また厚みについてはいずれもほぼ1.4cmを測り、ばらつきは極めて少ないが、1点のみ16は2.5cmを測る。

熨斗瓦　（第11図、第12図　17〜20）

8点の破片が出土した。うち凸面にハナレ砂の使用を認めるものは6点である。これらは平瓦と同様のつくりであるが、平瓦と異なる点は側面と凸面のなす稜にも面取りがなされることである。またハナレ砂の使用される6点は、凹面は砂が起こされてざらついている。他の2点は凸•凹面・側・端面とも丁寧にみがかれ銀化が著しい。幅の知れる資料は4点あり11.5cm〜12.2cm

の範囲内である。唯一全長の知れた17は23.7cmを測る。

軒桟瓦　（第9図　9）

軒部は3点、軒平部は1点のみであるが、軒丸部は全て蛇の目紋、軒平部の文様は軒平瓦と同様である。桟瓦部と軒平部は軒平瓦と同じ方法で接合され、軒平部周縁左端と軒丸部裏面に櫛で横方向に刻み目を入れて接合した上、軒丸部裏にあたる桟瓦部上面に縦に刻み目を入れ、小量の粘土を付け足して補強してある。いずれも黒ないし黒銀色で桟瓦部裏面にハナレ砂の使用は認められない。

桟瓦　（第11図　第11図　22〜25）

5点出土したが、うち2点（22、24）はいわゆる蠟燭桟瓦[3]である。まず今日言う日本型の桟瓦[4]2点はそれぞれ頭の切り込みと尻の切込みを残すが、切込みの幅は縦、横とも2.8cmと今日の規格版[5]のそれより小さい。23は裏面にハナレ砂の使用を認める。25は尻側の切込みを残し、裏面に櫛によるスベリ止めが施される。日本型桟瓦は3点とも表面は丁寧に磨かれ、桟の部分は丸い。次に蠟燭桟瓦については2点とも桟に丸味がなく、頂点にそって両側より縦にヘラナデを施し明確な稜線をなしている。平瓦にあたる部分は凹面は横方向にヘラナデを施す。凸面は不定方向にケズリを施し、ざらついている。24は全長27.4cmを測り、また22も桟の長さは24とほぼ同じで14.5cmを測る。

海鼠瓦　（第10図　21）

海鼠壁に用いられる海鼠瓦である。2点出土しているが、いずれも灰白色から暗灰色を呈しやや軟質である。21はやや中低気味で2つの針穴の周囲は釘止めされていたのか少し欠けている。上面には横位にヘラナデが施され、一方の端は縦に溝が彫られる。幅26.5cm、厚みは2.8cmを測る。

今回出土の瓦は全て黒色土からの出土であり、なにぶんにも出土量も乏しく、明確な遺構といった条件も整っていないので、ここでは各種の瓦に関する記述のみにとどめておきたい。

本項の執筆にあたっては、姫路市教育委員会　山本博利、秋枝　芳両氏より、御教示・御助言を得た。記して謝意を表する。

注

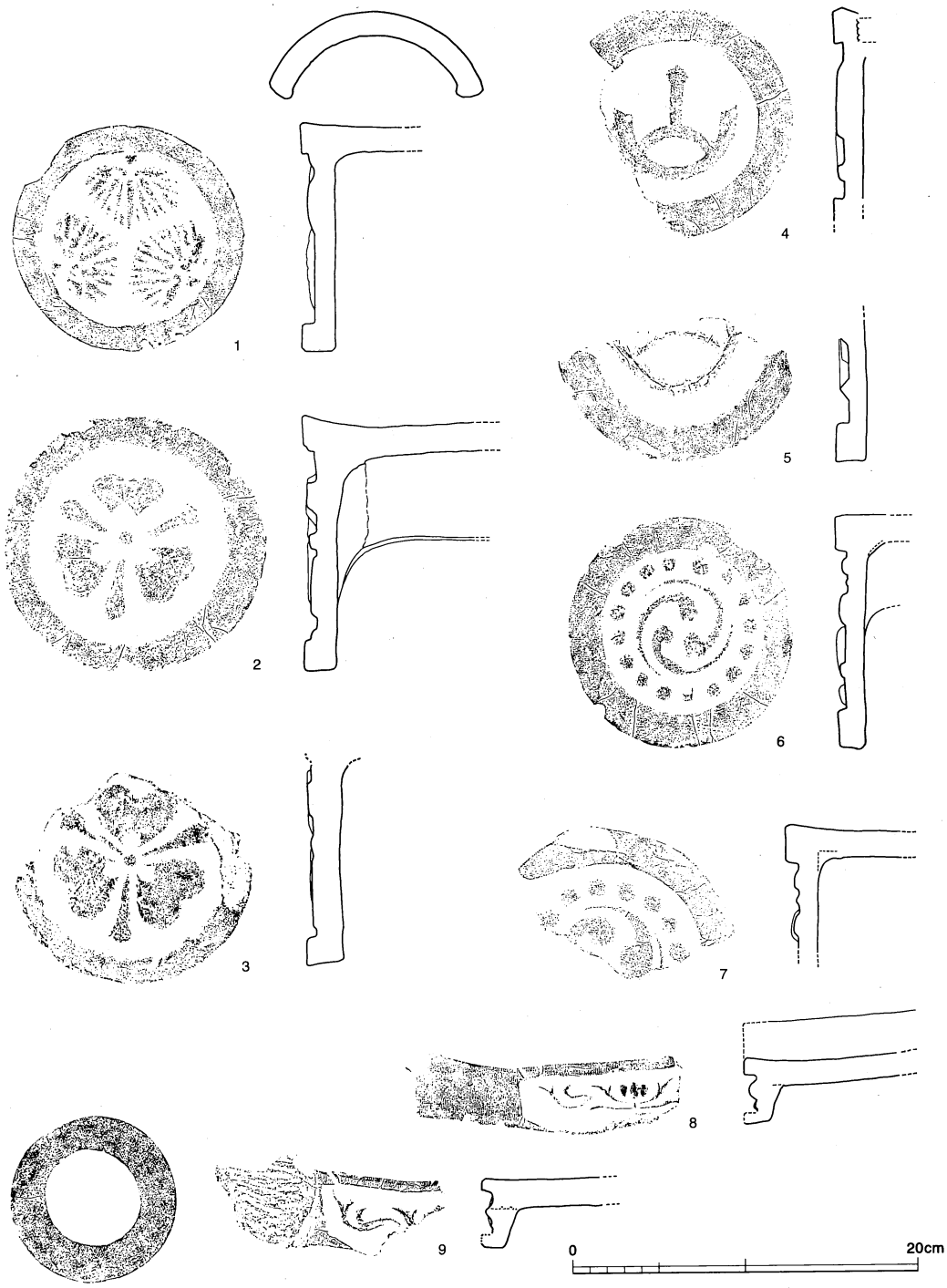
(1) 井上新太郎　1974『本瓦葺の技術』p.p272　東京　影国社

(2) 印南敏秀　1983「近代現代の瓦つくり」『山城の古瓦』p.p36　京都　京都府立山城郷土資料館

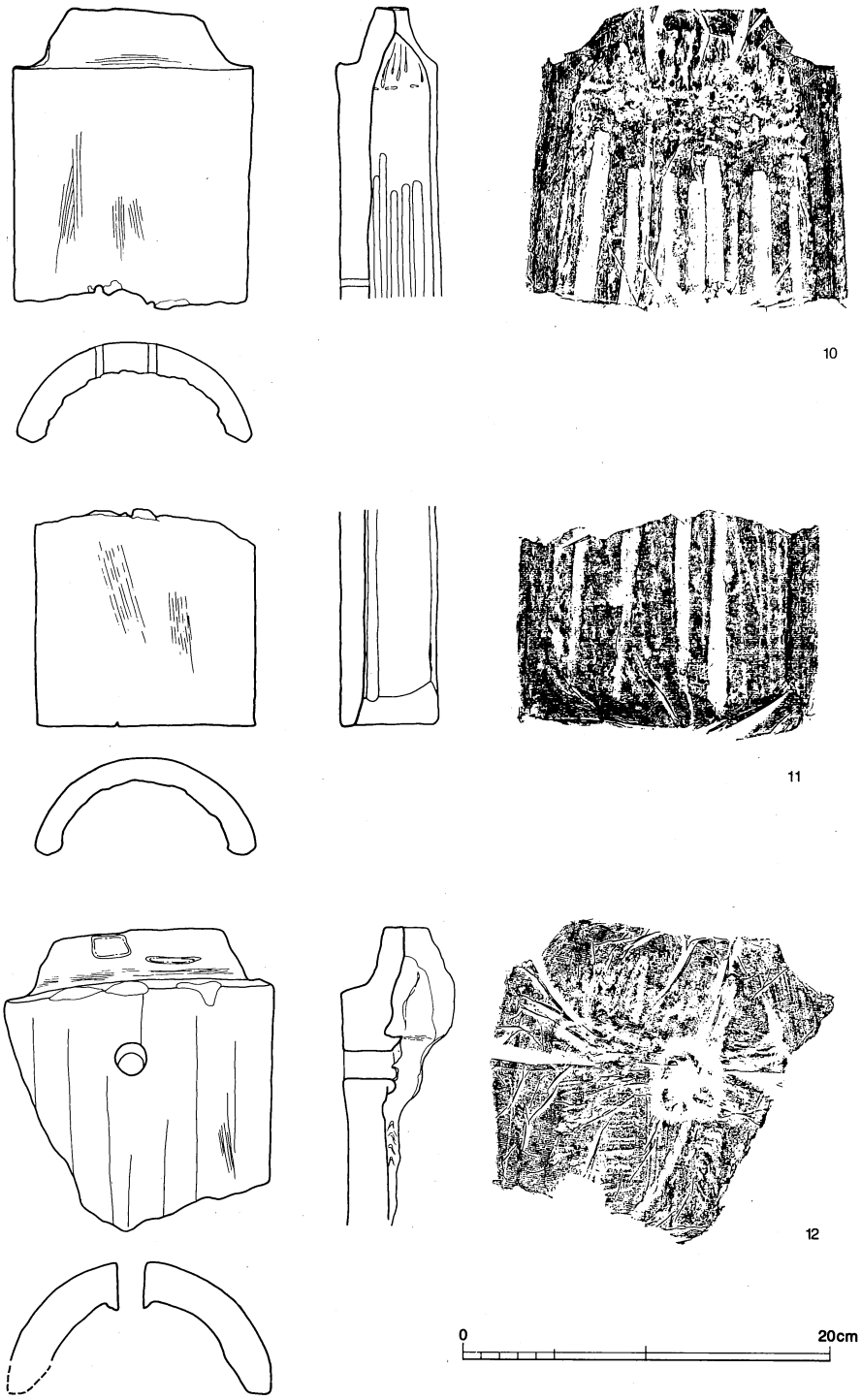
(3) 佐藤滋郎　1982『瓦と屋根構造』p.p155　京都　学芸出版社

(4) 坪井利弘　1976『日本の瓦屋根』p.p82　東京　理工学社

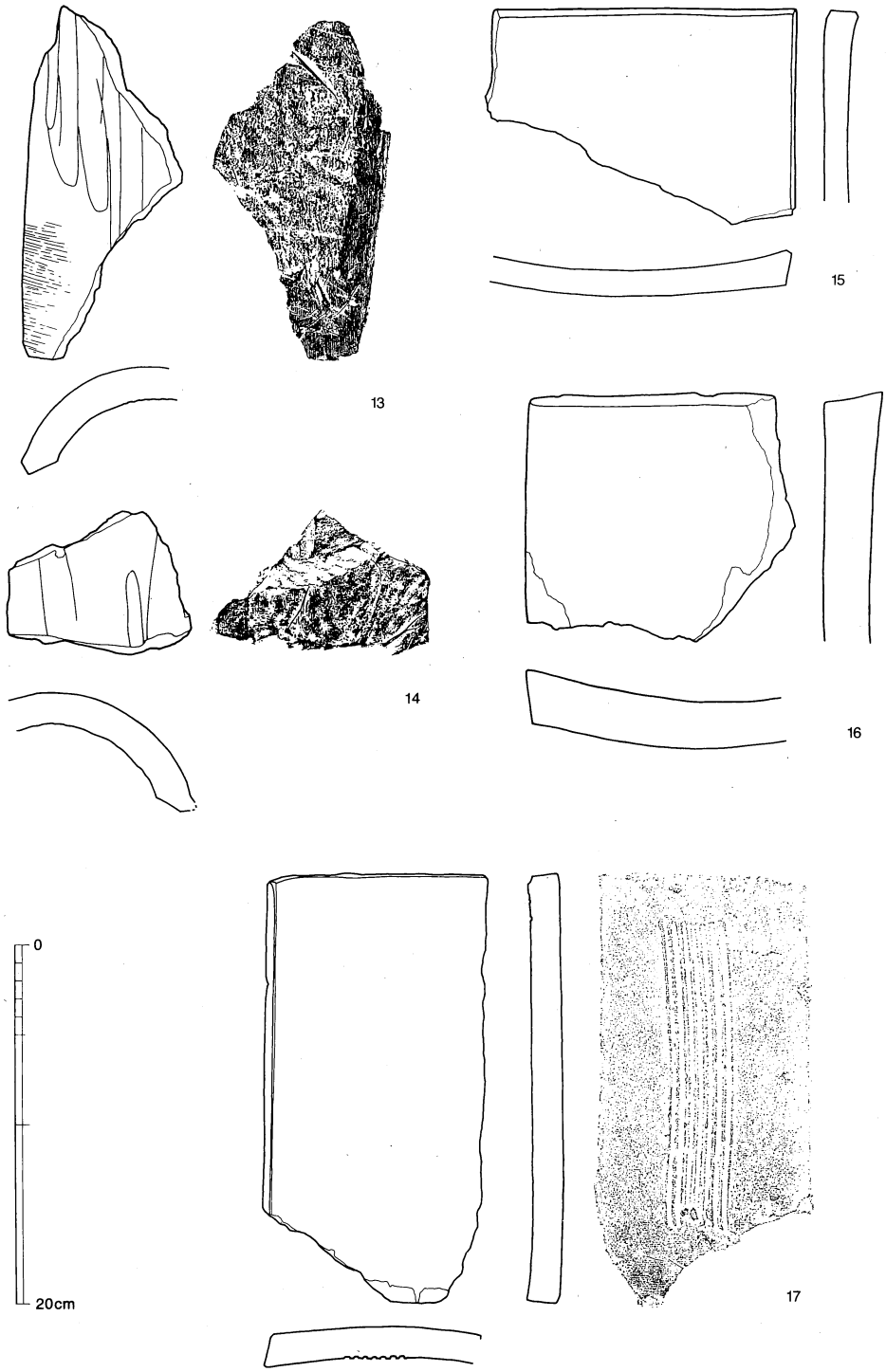
(5) JIS　A　5208で規定される粘土瓦の日本工業規格によれば、今日一般的に用いられる56形、64形の頭、尻2ケ所の切込みの寸法は3.5cmから4cm程度である。



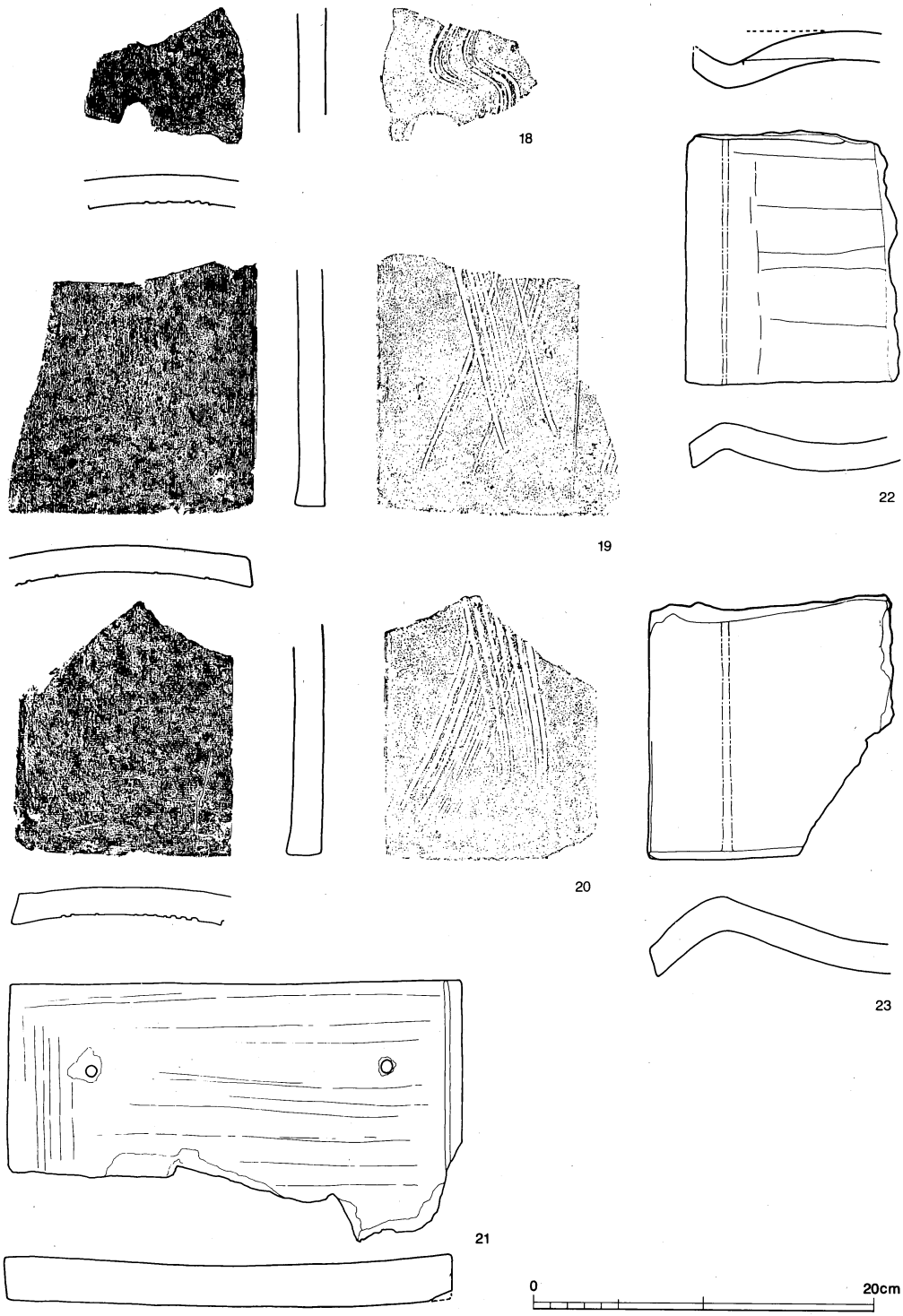
第９図　瓦実測図（黒色土中）



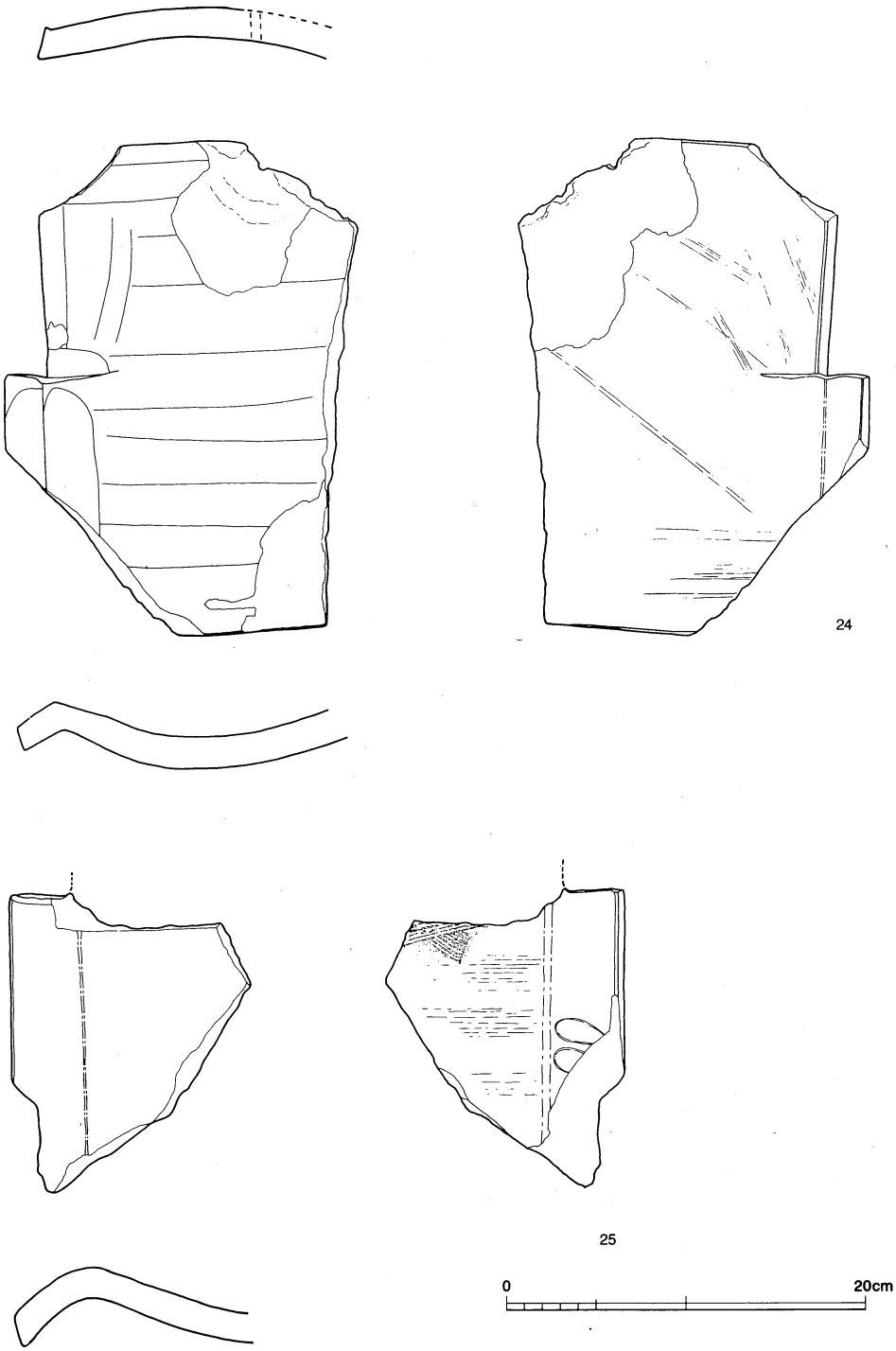
第１０図　瓦実測図（黒色土中）



第１１図　瓦実測図（黒色土中）



第１２図　瓦実測図（黒色土中）



第１３図　瓦実測図（黒色土中）

第３表　出土土器等観察表
法量の口径（　）は復原径

図	出土遺構	No	種　別	器　種	法量（cm）		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　考
					口径	器高			
14	SK01	1	土師質土器	皿	9.05	1.65	体部外傾、平底	ロクロナデ、底部糸切り	
		2	施釉陶器	埦	(8.2)		口縁部外反	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉（淡緑色）→外面白泥施文（イッチン掛け）→内面鉄釉施文	西播系、19c前半以降
		3	施釉陶器	土瓶	(10.0)		体部内彎	ロクロナデ→ロクロケズリ→外面トビガンナ施文→吊手穴貼付→鉄釉施釉、内面露胎	西播系、19c前半以降
		4	施釉陶器	埦	(6.6)	6.0	腰部屈曲、体部直立	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉→外面白泥施文(イッチン掛け)	西播系、19c前半以降、高台畳付釉拭き取り
		5	施釉陶器	壺			口縁部折り曲げ	ロクロナデ→施釉（淡黄緑色）→外面白泥施文(イッチン掛け)	
		6	無釉陶器	把手				型造り接合（梅花文等を型押し）→塗り土	
		7	施釉陶器	鉢または皿				ロクロナデ→ロクロケズリ→化粧掛（白色土）→鉄釉施文→施釉（淡黄色)、高台以下露胎	西播系、19c前半以降
		8	施釉陶器	灯火具	底径 6.4		平底	ロクロナデ→ロクロケズリ→灰釉施釉（淡暗緑色)、底部外面露胎	瀬戸・美濃系
		9	染付磁器	蓋				呉須（やや淡い)、丸文施文	肥前系、くらわんか手、18c
		10	染付磁器	碗	(9.1)		体部内彎	呉須（やや淡い)、丸文施文	肥前系、くらわんか手、18c
		11	染付磁器	碗	(10.4)	5.9	体部内彎	呉須（やや黒ずむ)、外面丸文、底部内面丸文施文	肥前系、くらわんか手、18c、釉調やや青味を帯びる、高台畳付砂付着
		12	染付磁器	碗	7.6	6.4	体部直立、口縁部外反、波状に整形	呉須（濃い藍色)、外面不明文施文	東山系？　高台畳付釉拭き取り、内・外面とも細かい貫入
		13	無釉陶器	擂鉢	(23.2)	10.1	口縁部直立、平底	ロクロナデ→内面クシ描→外面ロクロケズリ→ロクロナデ→口縁部沈線→外面塗り土	備前系、沈線外面２条、擂目11条１単位の左回り、底部未調整砂付着

図	出土遺構	No	種　別	器　種	法量（cm）		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　考
					口径	器高			
14	SK０３	1	染付磁器	碗	(10.8)	6.2	体部外傾、比較的薄手に成形	呉須、内面斜格子状文、界線、見込み草花文、外面界線、松竹文、界線施文	釉調やや青味を帯びる、高台畳付の釉拭き取り、砂付着
	SK０６	1	土師質土器	火消壺	(13.7)		体部内傾	内・外面ヨコナデ	胎土中に砂粒を含む、外面スス付着
		2	施釉陶器	埦	(7.6)		口縁部外反	ロクロナデ→施釉（淡暗緑色）→鉄釉・白泥梅花文施文	京焼系
		3	施釉陶器	埦	(8.0)	5.7	比較的高い高台、腰部屈曲、体部直立、口縁部外反	ロクロナデ→ロクロケズリ→灰釉施釉（淡黄緑色）→外面鉄釉・白泥梅花文施文	京焼系、見込み部突起、高台畳付の釉かきとり
		4	施釉陶器	埦	(7.7)		体部内彎、口縁部外反	ロクロナデ→ロクロケズリ→灰釉施釉	西播系、19Ｃ前半以降
		5	染付磁器	碗	(8.2)		体部やや内彎、比較的薄手に成形	呉須（発色良）、外面草花文、内面雷文帯施文	
15		6	土師質土器	焙烙			口縁部内傾、底部突出	体部内面ナデ（ヨコ方向）→口縁部内・外面ヨコナデ→突帯貼付け 体部外面ケズリ→体部外面ナデ	
		7	施釉陶器	鉢	34	7.1	口縁部外反、低い幅広の高台	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→外面凹線→内・外面灰釉施釉（淡黄緑色）	美濃系、16Ｃ後半～17Ｃ前半、見込み部6ケ所目跡、凹線2条、高台脇以下露胎
		8	施釉陶器	擂鉢	(35.2)	14.2	体部直線的に外傾、低い高台	ロクロナデ→内面クシ描き→ロクロナデ→口縁部沈線→内・外面鉄釉施釉	丹波系、沈線外面2条、擂目内面15条1単位、見込み部同心円状、中央部平行、底部外面6ケ所砂目跡
	SK０８	1	染付磁器	皿	(12.1)		口縁部やや外反、口縁端部尖り気味、薄手に成形	酸化コバルト、内面草花文、外面唐草文施文	明治以降
	茶褐色土中	1	染付磁器	皿			比較的低い高台	呉須、内面山水文施文	肥前系、19Ｃ、内・外面とも貫入

図	出土遺構	No	種　別	器 種	法量（cm）		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　考
					口径	器高			
15	茶褐色土中	2	染付磁器	皿			比較的厚手に成形	呉須（淡い）、格子状文施文	肥前系、くらわんか手、18ｃ、見込み蛇ノ目釉ハギ、高台畳付の釉かき取り
		3	染付磁器	猪口			体部直立	呉須、内面格子文、外面幾何学文施文	肥前系、19ｃ
		4	染付磁器	鉢			口縁部外反、多角形状に成形	呉須、内・外面施文	肥前系、19ｃ、色調やや青味を帯びる
		5	染付磁器	鉢			口縁部外反、多角形状に成形	呉須、内面斜格状文、外面花文施文	肥前系19ｃ、色調やや青味を帯びる
		6	染付磁器	皿				呉須、内面草花文、底部外面不明文施文	高台畳付の釉かき取り、内・外面粗い貫入
16	黒色土中	1	土師質土器	塩壺蓋	5.9	1.0		上面布目痕	
		2	瓦質土器	火舎			方形	内・外面ナデ	胎土赤褐色の砂粒を含む、焼成やや軟質
		3	土師質土器	焜炉			体部直立	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ→窓穿孔・脚窓穿孔→外面ミガキ	東山系、弥七焜炉
		4	土師質土器	焜炉？	底径（12.4）		体部直立、有脚	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ→窓穿孔・脚貼付→外面ミガキ	
		5	土師質土器	焙烙	（33.8）		体部直立、底部やや突出	体部外面ケズリ→ヨコナデ	
		6	土師質土器	壺？	底径（5.6）		体部内彎、平底	内・外面ロクロナデ、糸切り底	
		7	瓦質土器	羽釜	（28.2）		体部内彎、口縁部内傾	体部内面ナデ（ヨコ方向）┐ 体部外面ロクロケズリ──┘→ツバのヨコナデによる貼り付け→体部内・外面ロクロナデ→口縁部からツバ下面ロクロミガキ	胎土中に砂粒を含む、体部外面1ケ所貼付文
		8	無釉陶器	擂鉢	（39.6）		口縁部直立	ロクロナデ→内面クシ描→外面ロクロナデ→口縁部外面沈線	備前系、外面沈線2条

図	出土遺構	No	種　別	器 種	法量（cm）		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　考
					口径	器高			
16	黒色土中	9	無釉陶器	擂鉢	底径（17.7）		平底	ロクロナデ→内面クシ描→外面ロクロケズリ→ロクロナデ	備前系、内面擂目11条1単位、底部外面砂付着
		10	無釉陶器	擂鉢	底径（18.4）		平底	ロクロナデ→内面クシ描→外面ロクロケズリ→ロクロナデ	備前系、内面擂目9条1単位、見込み部擂目6条1単位、底部外面砂付着
17		1	無釉陶器	匣鉢			平底、体部直立	内・外面ロクロナデ	備前系、体部「#」の窯印、表面長石粒の吹き出し、建水転用？
		2	無釉陶器	擂鉢	（20.9）	7.7	口縁部直立、体部直線的に外傾、平底	ロクロナデ→内面クシ描→外面ロクロケズリ→ロクロナデ→口縁部沈線	備前系、口縁部沈線内面2条、外面2条、内面擂目12条1単位、底部内面8条1単位
		3	無釉陶器	鉢				ロクロナデ→外面ロクロケズリ→ロクロナデ	備前系？もしくは常滑系
		4	無釉陶器	鉢				ロクロナデ→外面ロクロケズリ→ロクロナデ	備前系？もしくは常滑系
		5	無釉陶器	蓋	7.4	9.0	口縁部直立	ロクロナデ→ロクロケズリ→湯気孔穿孔→つまみ貼付→外面塗り土、内面露胎	
		6	施釉陶器	蓋	7.8	2.1	体部内彎	ロクロナデ→ロクロケズリ→灰釉施釉	西播系、19ｃ前半以降、口縁端部の釉かき取り
		7	施釉陶器	堝	（18.9）		体部内彎、口縁部玉縁状	ロクロナデ→灰釉施釉（暗黄緑色）	西播系、19ｃ前半以降、器面全体に細かい貫入
		8	施釉陶器	塊				ロクロナデ→ロクロケズリ→灰釉施釉（淡暗緑色）→外面白泥施文（イッチン掛け）	西播系、19ｃ前半以降
		9	施釉陶器	小鉢	（6.7）	13.6	体部直立、平底	ロクロナデ→ロクロケズリ→灰釉施釉、底部露胎、糸切痕	西播系？内・外面細かい貫入、内面灰付着
		10	施釉陶器	堝	（21.8）		口縁部斜め上方に折り曲げ、口縁部端部つまみあげ	ロクロナデ→ロクロケズリ→口縁部ロクロナデ→把手貼り付け→施釉（暗緑灰色）	西播系、19ｃ前半以降、口縁部内・外面灰被り

図	出土遺構	No	種　別	器 種	法量（cm）		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　考
					口径	器高			
17	黒色土中	11	施釉陶器	蓋	17.8	5.0	口縁端部水平に外反	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→鉄釉施釉、内面灰釉施釉	西播系、19C前半以降
		12	施釉陶器	蓋	(15.8)		口縁端部水平に外反	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→鉄釉施釉→白泥施文（イッチン掛け）、内面灰釉施釉	西播系、19C前半以降
		13	施釉陶器	蓋	14.1	3.4	口縁端部水平に外反	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→鉄釉施釉→白泥施文（イッチン掛け）、内面灰釉施釉	西播系、19C前半以降
		14	施釉陶器	蓋	(18.0)	4.0	口縁端部水平に外反	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→鉄釉施釉→白泥施文（イッチン掛け）、内面灰釉施釉（淡暗黄緑色）	西播系、19C前半以降
18		1	施釉陶器	蓋	(15.2)	2.4	口縁端部水平に外反	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→鉄釉施釉→白泥施文（イッチン掛け）、内面灰釉施釉（淡黄緑色）	西播系、19C前半以降
		2	施釉陶器	蓋	(13.5)	(2.0)	口縁端部水平に外反	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→施文→鉄釉施釉→白泥施文（イッチン掛け）、内面灰釉施釉（淡黄緑色）	西播系？
		3	施釉陶器	堝	(15.6)		口縁部内彎気味に外傾、口縁端部つまみ上げ	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→鉄釉施釉、口縁部内面露胎	西播系、19C前半以降
		4	施釉陶器	蓋	(18.0)	4.0	口縁部水平に外反	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→鉄釉施釉、内面灰釉施釉（淡暗黄緑色）	西播系、19C前半以降
		5	施釉陶器	堝	(14.8)		口縁部内彎気味に外傾、口縁端部つまみ上げ	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→注口貼付→鉄釉施釉、内面灰釉施釉	西播系、19C前半以降
		6	施釉陶器	堝	(15.6)		体部くの字状に屈曲、口縁部内彎気味に外傾、口縁端部つまみ上げ	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→鉄釉施釉、内面白濁釉施釉	西播系、19C前半以降
		7	施釉陶器	堝	(15)		口縁部内彎気味に外傾	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→鉄釉施釉	西播系、19C前半以降
		8	施釉陶器	堝	(18.4)		体部くの字状に屈曲、口縁部内彎気味に外傾、口縁端部つまみ上げ	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→トビガンナ施文→鉄釉施釉、内面灰釉施釉	西播系、19C前半以降

図	出土遺構	No	種　別	器 種	法量（cm）		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　考
					口径	器高			
18	黒色土中	9	施釉陶器	堝	(18.1)		口縁部内彎気味に外傾、口縁端部つまみ上げ	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→白濁釉一部施釉、内面灰釉	西播系、19C前半以降
		10	施釉陶器	壺	(10.2)		体部内傾、口縁端部つまみ上げ	ロクロナデ→内・外面鉄釉施釉→外面黒釉施釉	丹波系？
		11	施釉陶器	埦	(7.2)		口縁部外反	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→灰釉施文、白濁釉施釉、内面白濁釉施釉	丹波系？露胎部淡赤褐色
		12	施釉陶器	小鉢	(7.6)	4.7	体部直立	ロクロナデ→ロクロケズリ→内・外面灰釉施釉（暗黄緑色）、底部露胎	
		13	施釉陶器	壺？			碁笥底風	外面ロクロナデ→白色化粒土→施釉（白色）、内面ロクロナデ→鉄釉施釉	外面細かい貫入
		14	施釉陶器	鉢	(18.0)	(12.0)	体部直立	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→凹線→内・外面褐釉施釉	丹波系？外面凹線3条
		15	施釉陶器	植木鉢			体部直立、高台4ケ所抉り	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→内・外面鉄釉施釉、高台脇以下露胎	丹波系？底部中央穿孔、底部内面2ケ所目跡
19		1	施釉陶器	埦	(8.0)		口縁部外反、体部内彎	ロクロナデ→ロクロケズリ→内・外面白濁釉	京焼系
		2	施釉陶器	埦				ロクロナデ→外面ロクロケズリ→灰釉施釉（淡黄緑色）、高台脇以下露胎、赤褐色	京焼系、鉄釉の細かい斑点
		3	施釉陶器	蓋			口縁部直立	ロクロナデ、外面呉須、鉄釉松葉文、白濁釉施釉、内面露胎	京焼系
		4	施釉陶器	蓋	7.6	2.3	口縁部直立	ロクロナデ、外面白濁釉施釉、鉄釉・緑釉施文、内面露胎	京焼系
		5	施釉陶器	蓋	5.8	3.4	口縁部直立	ロクロナデ、外面菊文貼付、施釉（淡黄色）、内面露胎	京焼系
		6	施釉陶器	油指	(6.2)		体部直立、口縁部直立	ロクロナデ→ロクロケズリ→白濁釉施釉、内面体部下半以下露胎	瀬戸・美濃系？外面細かい貫入
		7	施釉陶器				体部直立、平底	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→灰釉施釉、内面・底部露胎	瀬戸・美濃系？
		8	施釉陶器				体部直立、平底、高台削り出し	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→白濁釉施釉、内面露胎	瀬戸・美濃系？外面細かい貫入

図	出土遺構	No	種　別	器種	法量（cm）		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　考
					口径	器高			
19	黒色土中	9	施釉陶器	壺			碁笥底	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉	瀬戸・美濃系
		10	施釉陶器	壺	(7.5)		口縁部直立、体部内彎	ロクロナデ→外面化粧土→鉄釉施文→施釉、内面露胎	瀬戸・美濃系？
		11	施釉陶器	蓋	(14.9)	2.2	体部内彎	ロクロナデ→沈線→施釉（淡灰黄色）	沈線4条
		12	施釉陶器	火舎	(20.6)		口縁部玉縁状	ロクロナデ、内・外面施釉（2釉かけ分け、暗緑色、淡黄灰色のにじみ）	瀬戸・美濃系、細かい貫入
		13	施釉陶器	甕	(23.0)		口縁部外傾、口縁端部水平	ロクロナデ→ロクロケズリ→内・外鉄釉施釉	
		14	施釉陶器				碁笥底風	ロクロナデ→外面ロクロケズリ、内面灰釉（淡緑色）	
		15	施釉陶器	壺	(6.8)		頸部直立	ロクロナデ、外面化粧土→施釉（白色）、内面露胎	器面細かい貫入
		16	施釉陶器	壺	(7.0)		頸部直立	ロクロナデ→外面白色土化粧掛け→施釉（白色）、内面露胎	器面細かい貫入
		17	施釉陶器	灯火具	7.25	4.45	口縁部水平、体部直線的に外傾、平底	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→内・外面鉄釉施釉、底部中央部穿孔	
		18	施釉陶器	鉢？	底径 (11.2)		体部直立	ロクロナデ→外面ロクロケズリ→凹線→内・外面鉄釉施釉、高台脇以下露胎	高台畳付凹線1条
		19	施釉陶器	甕	(28.0)		口縁部水平	ロクロナデ→ロクロケズリ→内・外面鉄釉施釉	
20		1	施釉陶器	蓋	6.4	3.0	口縁部外傾	ロクロナデ→外面禾目状施文→褐釉施釉、内面露胎	体部上面3ケ所目跡
		2	施釉陶器	蓋				ロクロナデ→外面褐釉施釉→白泥・緑釉・青釉施文、内面灰釉施釉	内面細かい貫入
		3	白磁	Ⅲ	13.55	3.8	体部波状に成形、蛇ノ目凹形高台	内・外面菊皿風に成形、施釉（白色）、内面1ケ所鉄釉の斑点	肥前系、18〜19c前半、高台畳付まで施釉
		4	染付磁器	Ⅲ	9.4	2.6	体部内彎	呉須（やや黒ずむ）内面界線、草花文、見込み部草花文、見込み部蛇ノ目釉ハギ	肥前系、くらわんか手、18c、高台畳付釉かき取り
		5	染付磁器	Ⅲ	9.8	2.6	体部内彎	呉須、内面界線、山・木・鳥居文、界線、見込み部蛇ノ目釉ハギ	肥前系、くらわんか手、18c、高台畳付釉かき取り

図	出土遺構	No	種　別	器 種	法量（cm）		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　考
					口径	器高			
20	黒色土中	6	染付磁器	皿	10.0	2.6	体部内彎	呉須、内面界線、山水・鳥居文、界線、見込み部蛇ノ目釉ハギ	肥前系、くらわんか手、18c、高台畳付釉かき取り
		7	染付磁器	皿	9.2	3.1	体部内彎、口縁端部尖り気味	呉須（やや淡い）草花文、見込み部蛇ノ目釉ハギ	肥前系、高台畳付釉かき取り
		8	染付磁器	皿	(9.0)		体部内彎	呉須、内面格子状文、口縁端部釉切れ	肥前系、くらわんか手、18c
		9	染付磁器	皿	(9.0)		体部内彎	呉須、内面格子状文	肥前系、くらわんか手、18c
		10	染付磁器	碗	(8.8)		体部直立	呉須、外面草花文	肥前系、19c
		11	染付磁器	碗	(8.3)	4.5	体部内彎、口縁端物尖り気味	呉須、内面亀甲文、界線、見込み部花文、外面草花文	肥前系、19c
		12	染付磁器	鉢	(14.9)		体部直線的に外傾	呉須、内面草花文、外面唐草文	肥前系、19c、焼き継ぎ痕あり
		13	染付磁器	皿			体部内彎	呉須（やや淡い）、内面草花文、外面唐草文、見込み部蛇ノ目ハギ	肥前系、くらわんか手、18c
		14	染付磁器	碗	(10.4)	5.1	口縁部若干外反気味、口縁端部尖り気味	呉須（やや淡い）、界線、見込み部花文、外面界線、花文、界線	肥前系、くらわんか手？、18c
		15	染付磁器	碗	(11.0)	6.0	体部外傾	呉須（やや淡い）、内面界線、斜格子状文、外面界線、格子状文	肥前系、くらわんか手、18c、器面に釉切れ
		16	染付磁器	碗				呉須（淡い）、内面界線、見込み部不明文、外面草花文、界線	肥前系、くらわんか手、18c、高台畳付釉かき取り
21		1	染付磁器	碗	11.0	6.1	体部外傾、口縁端部尖り気味	呉須（淡い）、内面界線、圏線、見込み部花文、外面界線、梅花文、界線	肥前系、くらわんか手、18c
		2	染付磁器	碗	(9.6)	5.9	体部外傾	呉須（淡い）、内面界線、見込み部花文、外面界線、草花文、界線	肥前系、くらわんか手、18c
		3	染付磁器	皿	(8.6)	3.0	口縁部輪花状に成形	呉須、内面山水文	肥前系、19c
		4	染付磁器	皿	13.3	3.8	口縁部輪花状に成形、蛇ノ目凹形高台	呉須、内面草花文、外面山文	肥前系18〜19c、見込み部3ケ所目跡、高台裏砂付着

図	出土遺構	No	種　別	器 種	法量（cm）		形態の特徴	成形・調整技法の特徴・文様	備　考
					口径	器高			
21	黒色土中	5	染付磁器	皿	14.45	4.2	口縁部輪花状に成形、蛇ノ目凹形高台	呉須、内面山水文	肥前系、18〜19ｃ高台畳付まで施釉
		6	染付磁器	皿	底径13.6		比較的径の大きい高台	呉須、内面草花文、界線、花文、見込み部松竹梅文、外面唐草文、界線、高台裏「太明成化年製」銘	肥前系、18ｃ
22		1	染付磁器	蓋	9.1	3.2	口縁部やや外反	呉須、内面界線、雲文、界線、見込み部、草花文、外面界線、草花文、界線、高代裏「福」字？	
		2	染付磁器	蓋	(9.8)	2.9	口縁端部やや尖り気味	呉須、内面丸文に直線とジグザグ文、外面丸文に直線とジグザグ文	高台畳付の釉かき取り、砂付着
		3	染付磁器	皿	10.4	2.6	口縁部輪花状に成形、体部直線的に外傾	呉須、内面草花文	
		4	染付磁器	碗			体部内彎	呉須、内面見込み部不明文、外面草花文	
		5	染付磁器	碗	(8.8)		口縁部外反	呉須、内面界線、見込み部花文、外面草花文、界線	
		6	染付磁器	蓋	8.6	3.4	体部内彎	呉須、内面雷文帯、界線、草花文、外面亀甲文、松竹梅文	
		7	染付磁器	碗	(10.7)	6.7	体部直立、高台外傾、畳付幅広	酸化コバルト、内面１重網目文、外面口縁部から体部はけ塗り、格子目文	
		8	染付磁器	碗	(15.0)	7.2	体部内彎	呉須、内面幾何学文、界線、見込み部、草花文、外面鶴文、界線	高台畳付の釉かき取り
		9	染付磁器	合子	7.0	2.1	口縁端部つまみ上げ、体部直立、平底	呉須、外面草花文、口縁部・底部、外面露胎	
		10	染付磁器	蓋	(10.7)			呉須、外面草花文、口縁部露胎	
		11	染付磁器	碗	(10.6)			呉須（やや黒ずむ）、内面界線、外面草花文、界線	
		12	染付磁器	碗	(11.4)		体部直線的に外傾	酸化コバルト、内面幾何学文、外面草花文	
		13	染付磁器	植木鉢	(11.8)	9.3	口縁部水平に外反、体部直線的に外傾、底部抉り入り	呉須、内面口縁上面花文、体部下面以下露胎、外面界線、円形文、界線、蓮弁文、界線	底部内面、砂付着重ね焼痕
		14	染付磁器	急須	(7.0)		口縁部直立、体部内彎	呉須、外面雷文帯、松・人物文	東山系、19ｃ
		15	色絵磁器	坏				赤絵、色絵、外面蓮弁文、花文	上絵付けの為釉剝落、高台畳付の釉かき取り

Ⅳ、おわりに

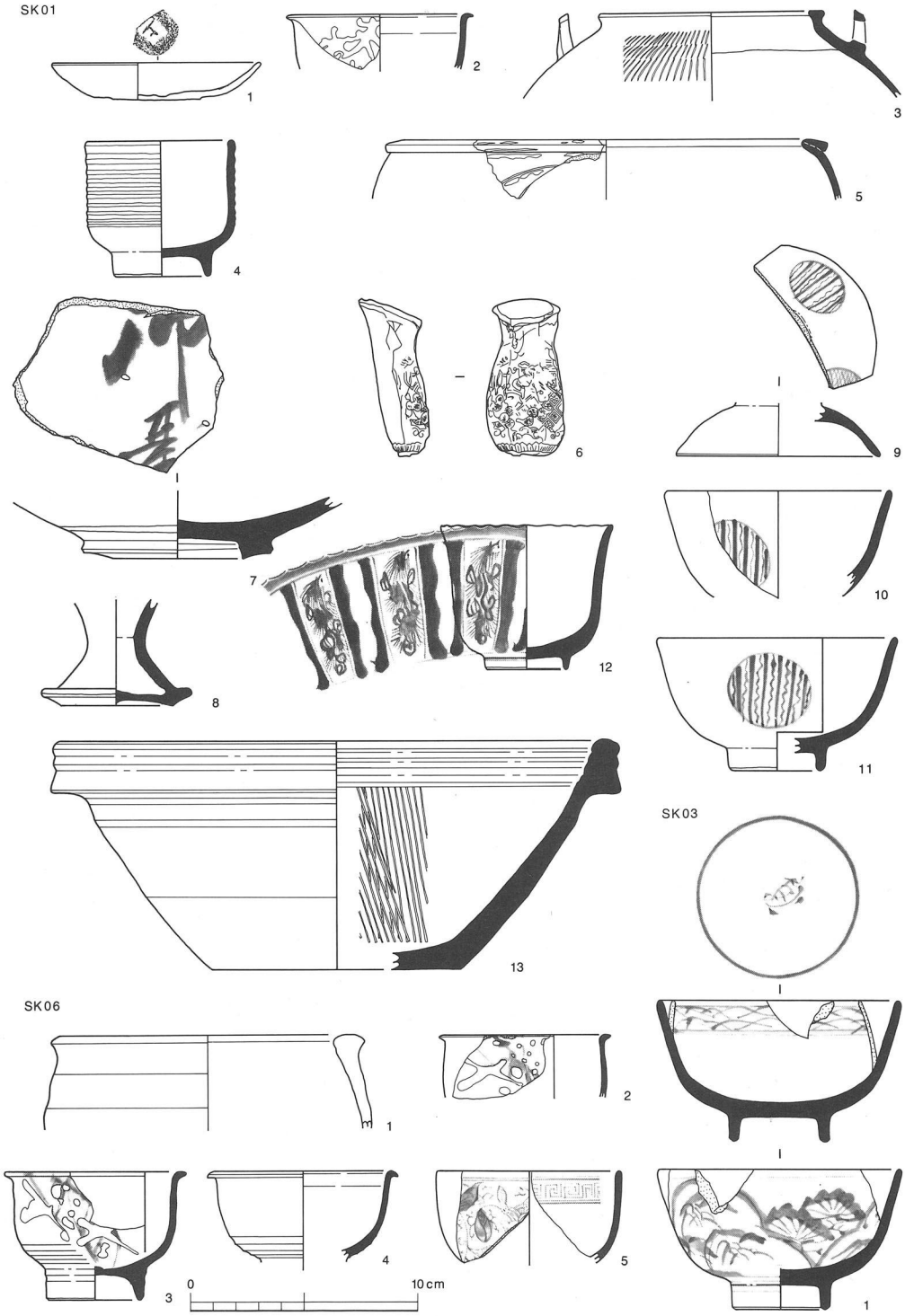
今回の調査は、小規模なもので調査期間も3日間と短いものであった。三ノ曲輪に相当するが、大手から登城する中心道にあたるため遺構は存在しないものと思われたが、土器廃棄土壙が確認された。純然たる土器廃棄土壙はSK06だけだが、9基の遺構を検出し陶磁器などが出土している。遺構の性格からしても、明石城の機能を失ってから短期間のうちに築かれたものと思われる。遺構の規模などから大規模な土器廃棄は行っておらず、南北方向へ遺構面は延びていないことも明白である。

その上面は茶褐色土や焼土層・撹乱土層があり、その上に黒色土が広く堆積しており多数の遺物を包含している。この層こそ、明石城の機能を全く喪失した時期の層、すなわち明石城破壊と考えられるのではないかと思われる。ただ、出土土器から遺構出土土器の時期差は認められず、絶対的なことは言えないが層序的には二時期の土器廃棄時期を把握出来た。出土遺物から与えられる年代からも19世期後半を下限としており、1891（明治6）年の廃城令を中心とする城郭取り壊しの遺構と考えられないかと思われる。遺構と黒色土の2時期を断定するのは現時点での考古学的手法からは不可能であるが、今後の課題となろう。

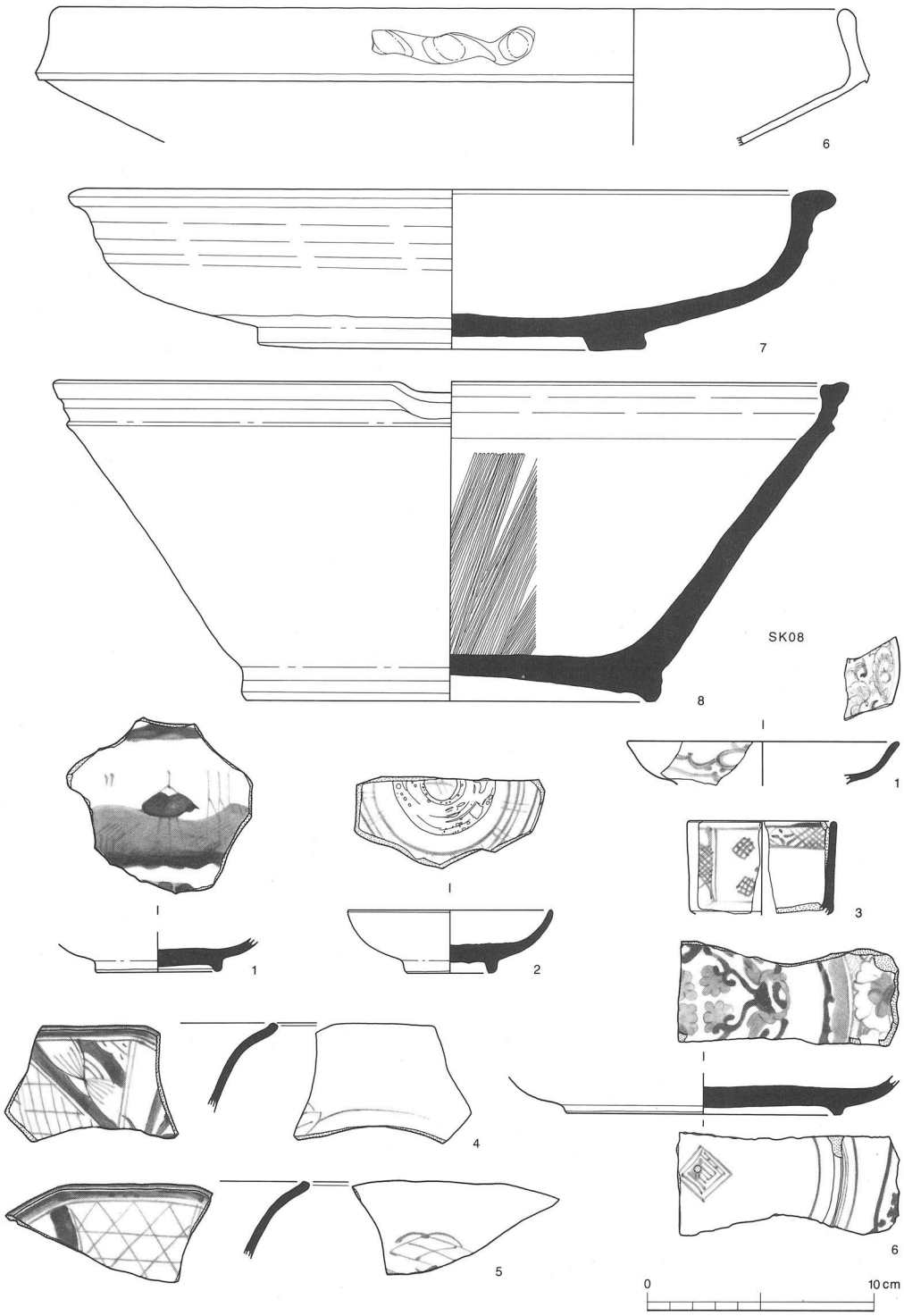
昭和52〜54年度の調査では、土師器・瓦の出土はあったが陶磁器類は少数であった。今回の調査では、土師器をはじめ無釉陶器・施釉陶器・磁器が出土しており、産地を決定出来るものも多かった。最近、県下でも近世城郭の調査が毎年実施されており、多大な成果を挙げているが、今回の明石城跡の調査も比較検討することによって、さらに多くの事実が導き出されるものと思われる。

県立明石公園として年々整備計画が進められるはずであるが、小面積でも新たな事実を引き出される可能性は大であり、ミクロな調査の継続が望まれる。公園外では、山陽電鉄高架工事や安全対策事業に伴う県道・市道の拡幅工事が計画されている。内濠内の調査しか行なわれていなかったが武家屋敷の調査が行われると明石城の新しい側面が見出されるかもしれない。城内と城外の出土土器の検討など出来ればなおさらであろう。大規模開発はもちろんのこと小規模な調査の積み重ねが心要な故縁である。そのための基礎資料の一つとなれば幸いであり、御教示をお願いする次第である。

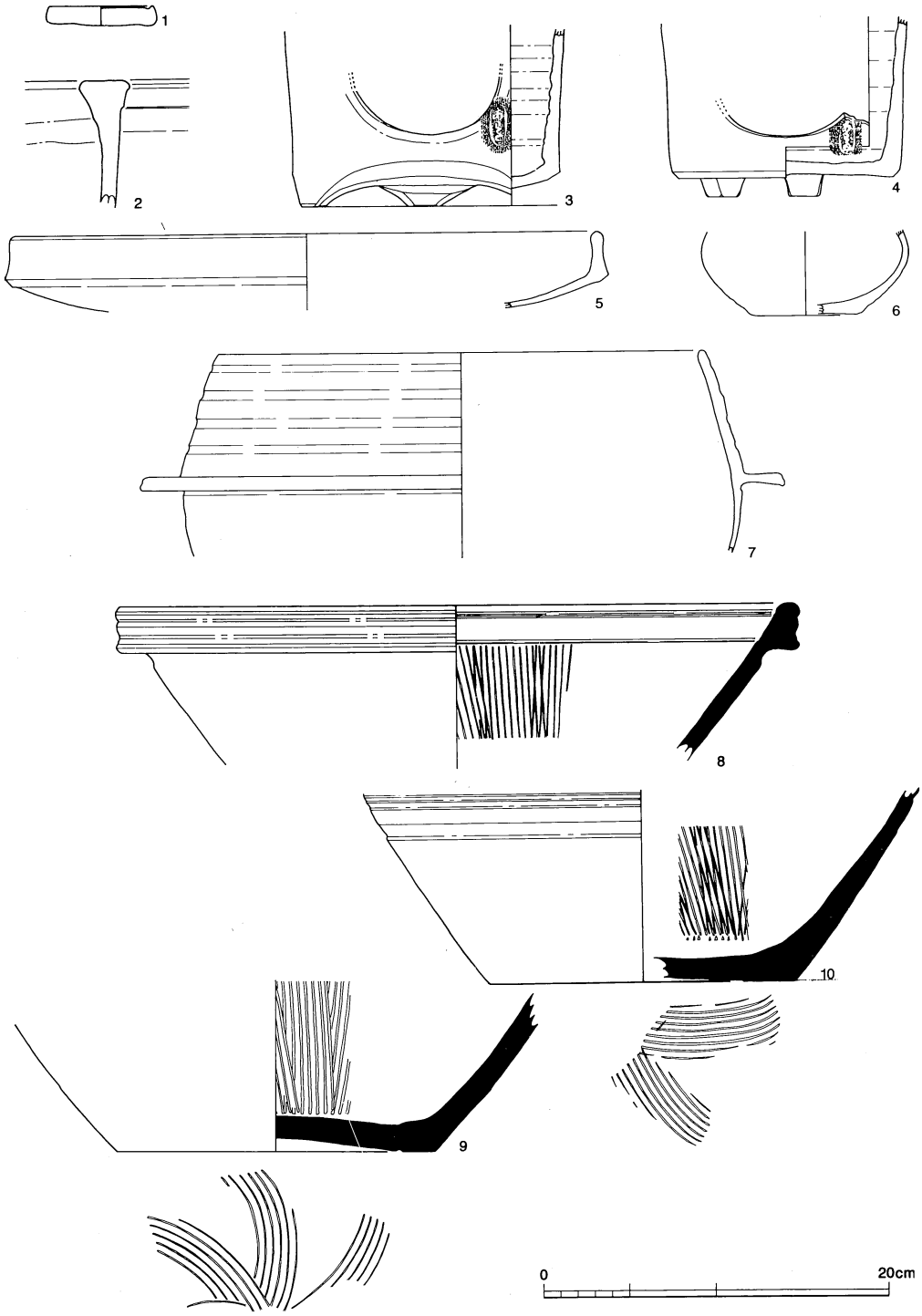
土 器 実 測 図



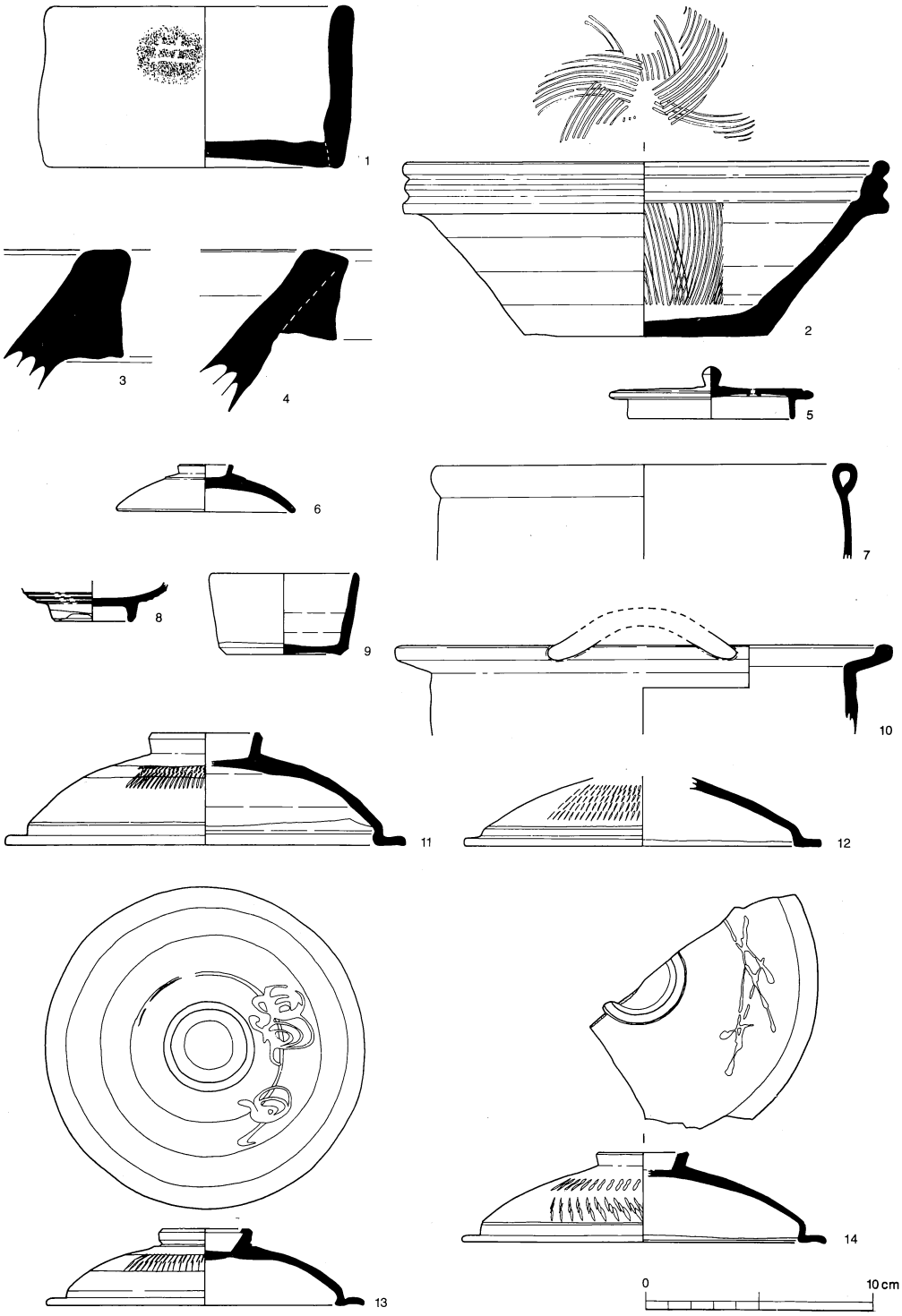
第１４図　遺物実測図（SK０１～SK０６）



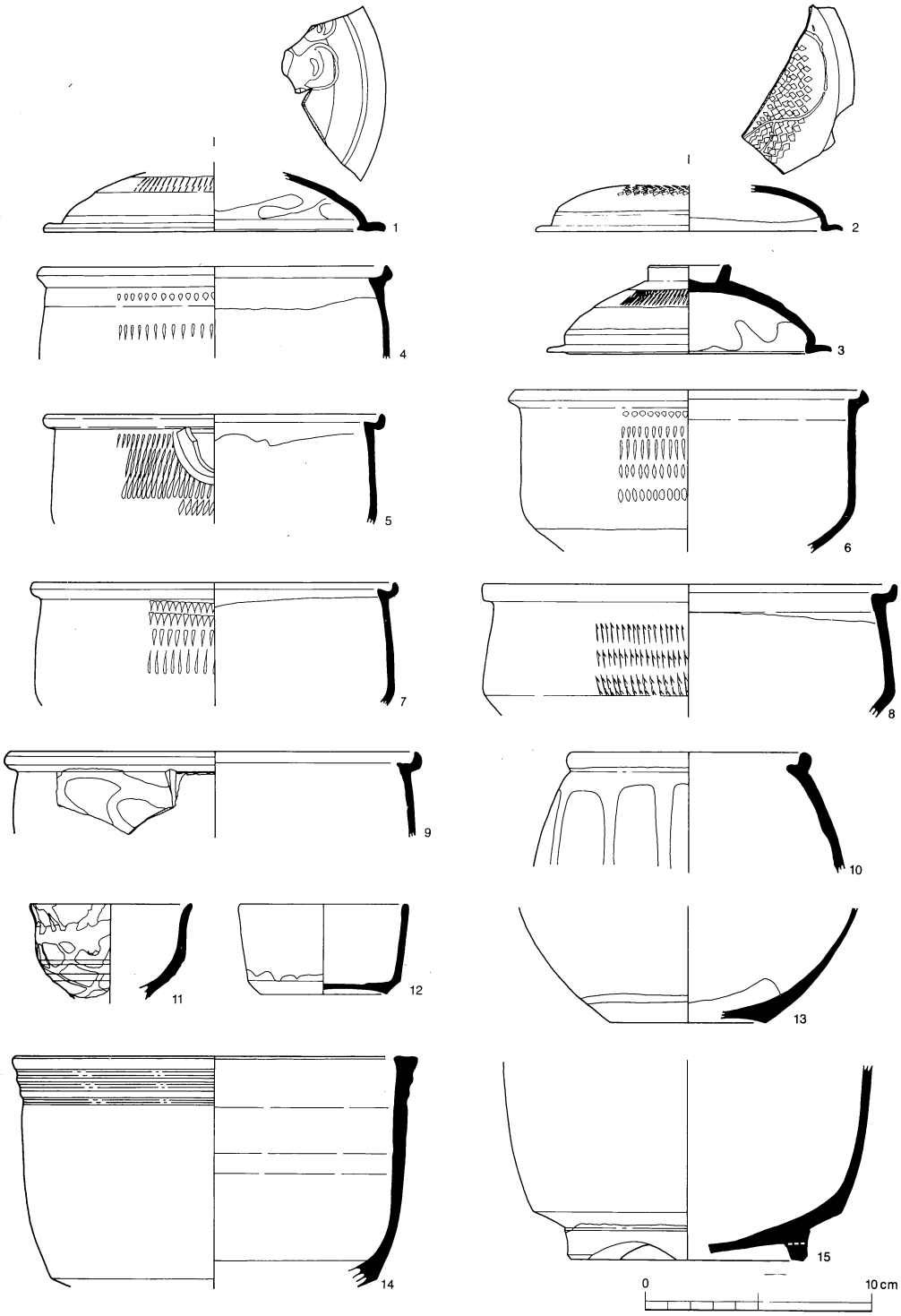
第１５図　遺物実測図（SK０６～SK０８・茶褐色土中）



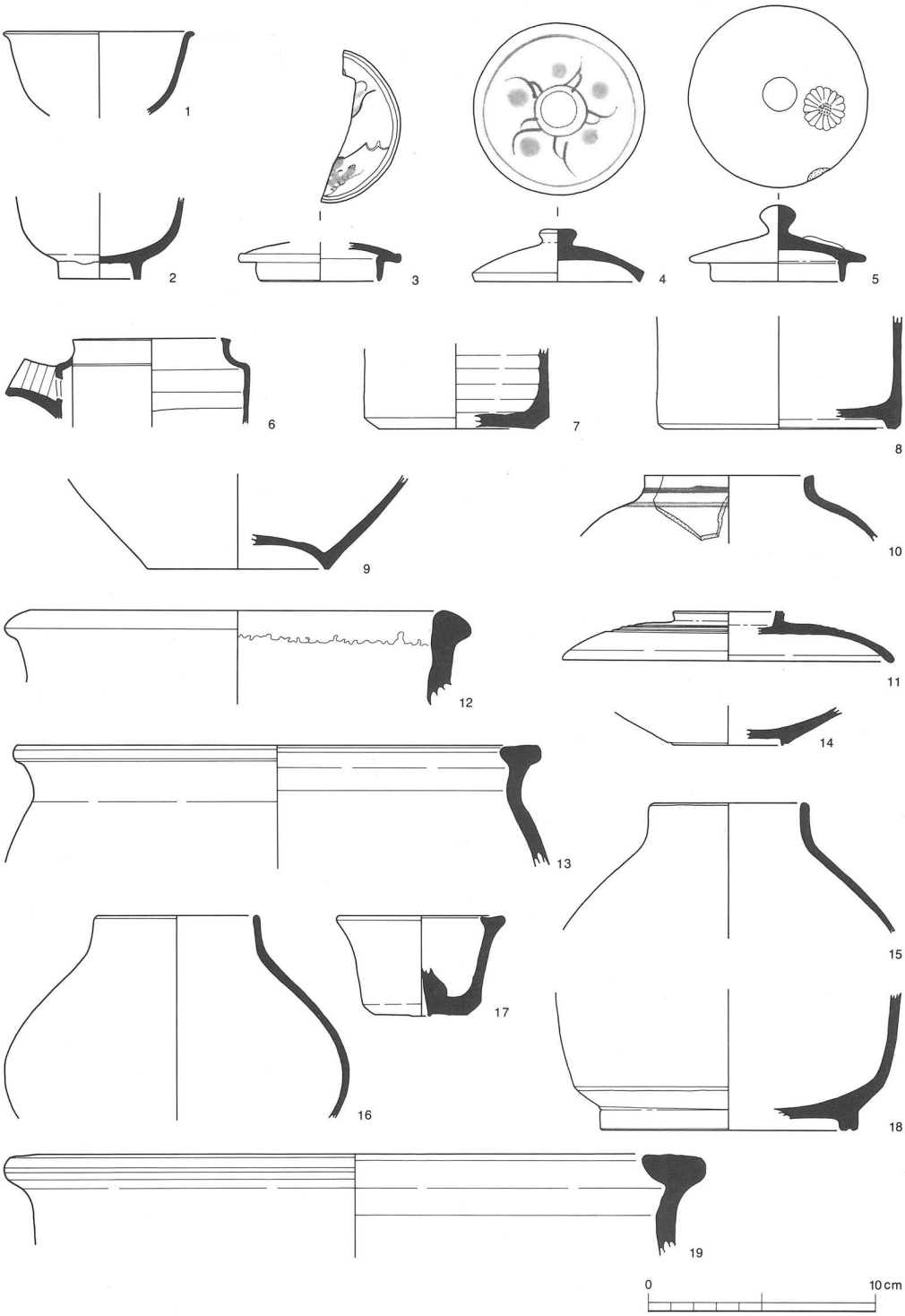
第１６図　遺物実測図（黒色土中）



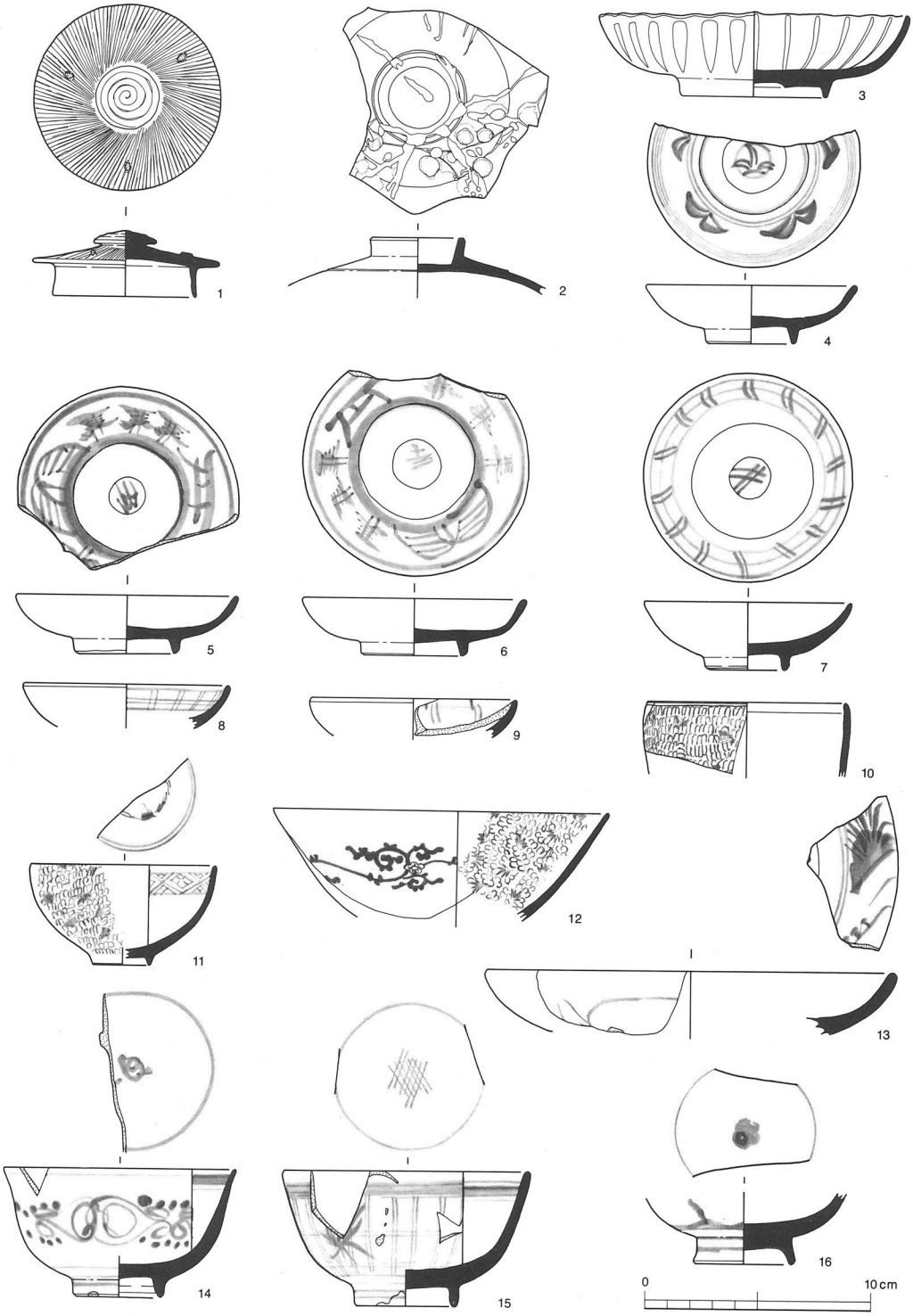
第１７図　遺物実測図（黒色土中）



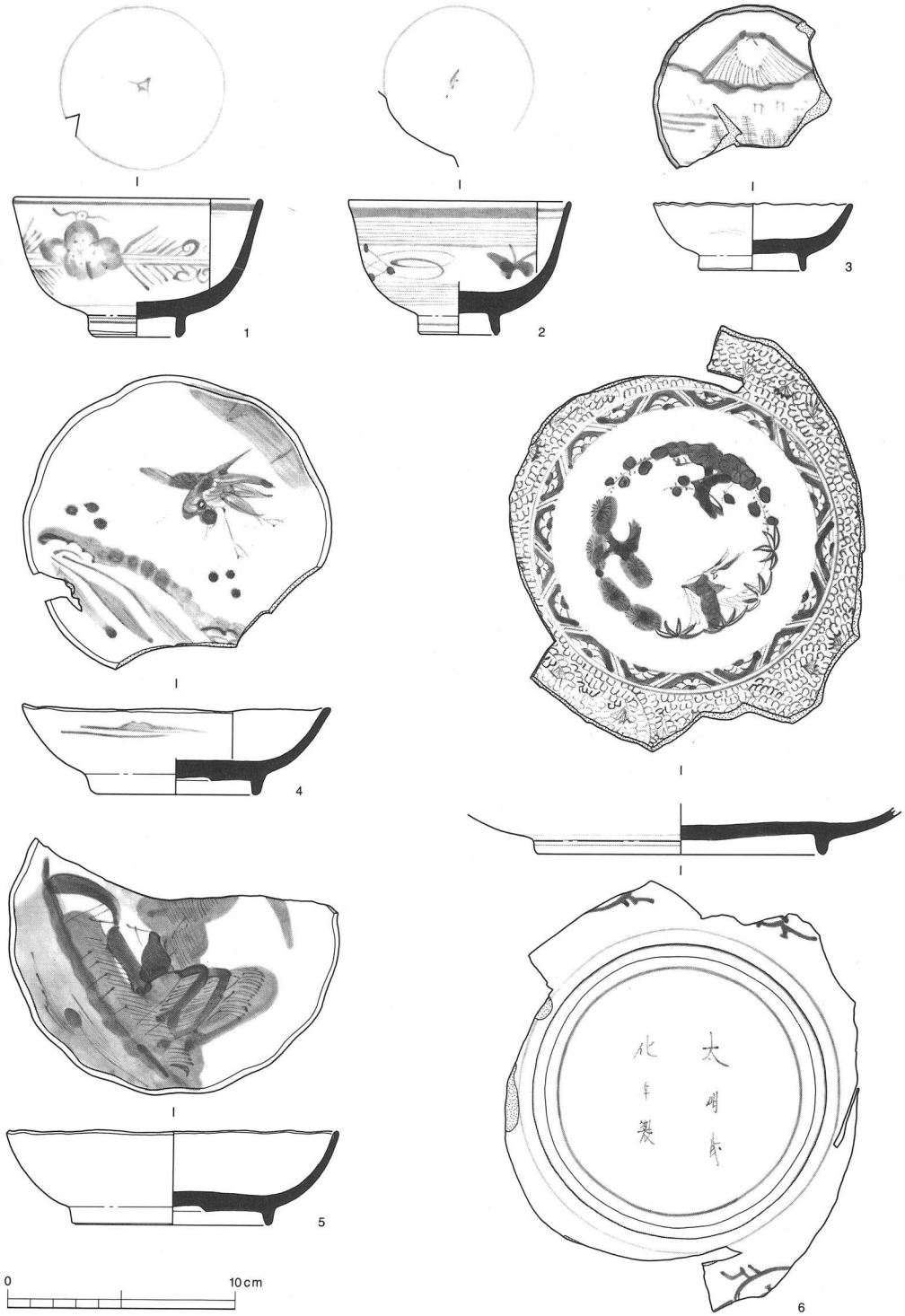
第１８図　遺物実測図（黒色土中）



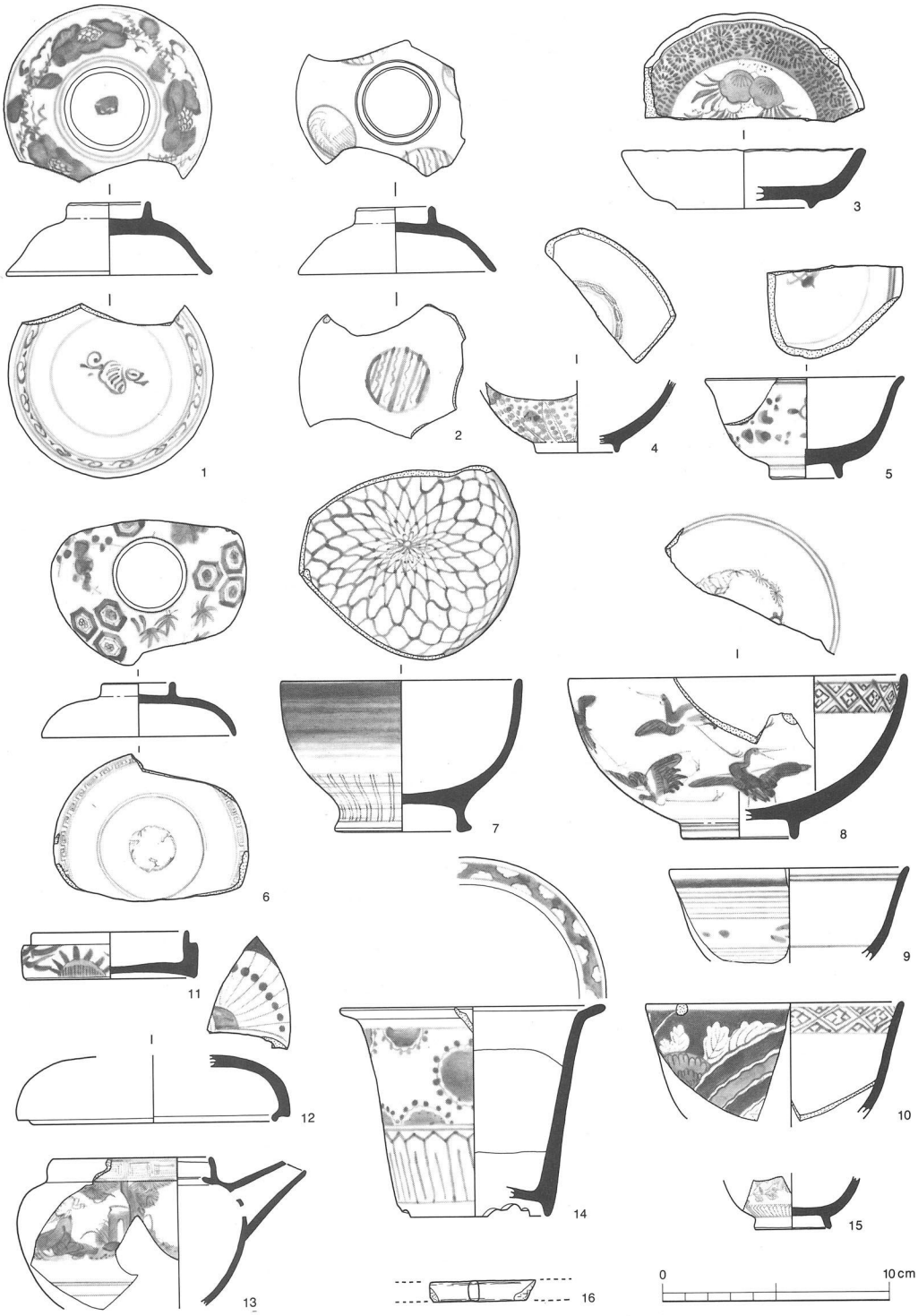
第１９図　遺物実測図（黒色土中）



第２０図　遺物実測図（黒色土中）



第２１図　遺物実測図（黒色土中）



第２２図　遺物実測図（黒色土中）

図 版

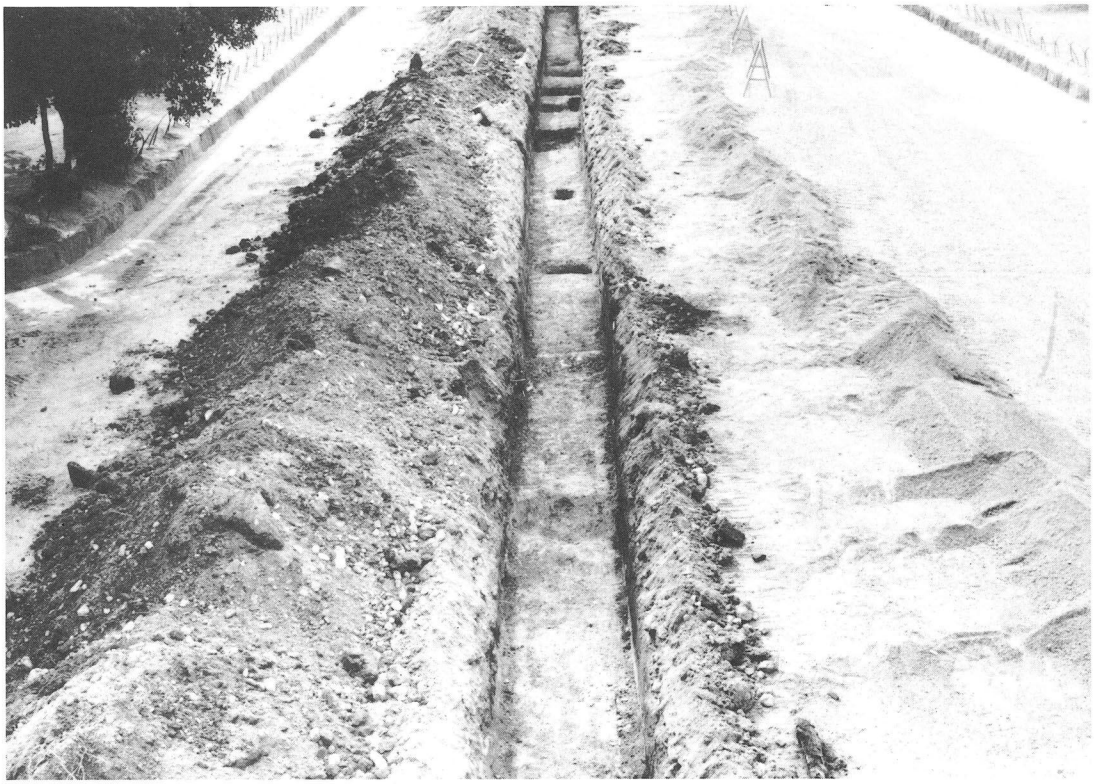
明石公園（正門前大路）

図版1

明石城跡航空写真

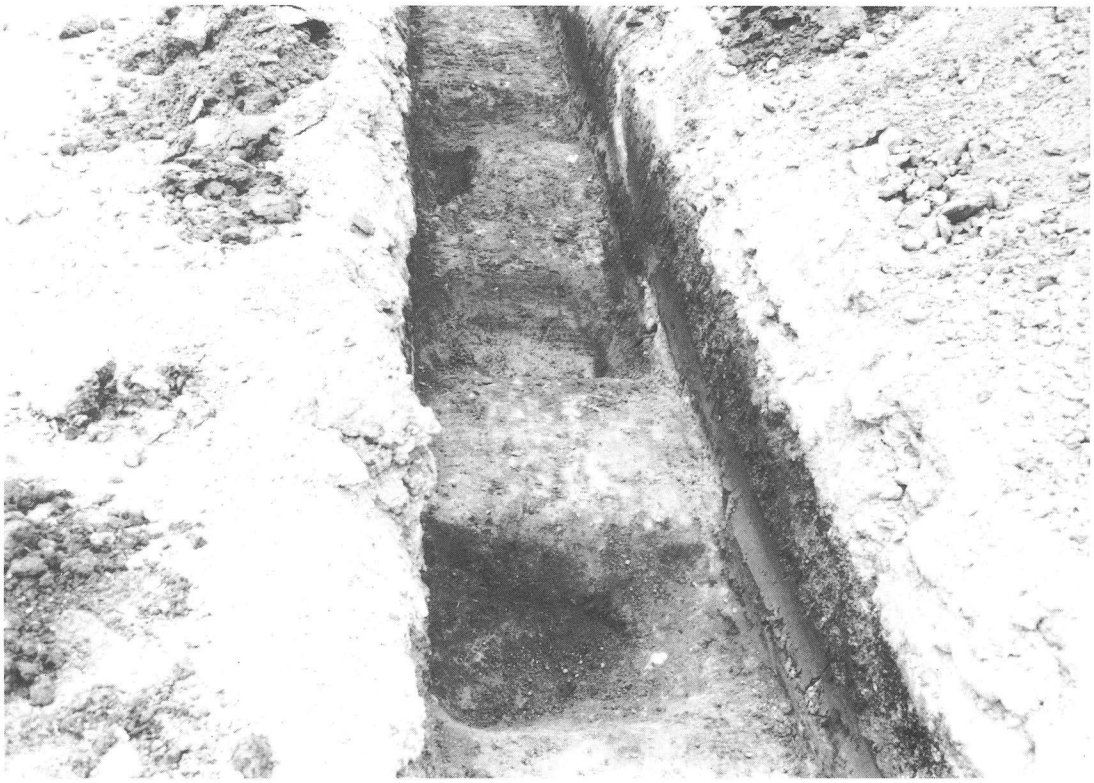
調査地遠景（巽櫓から）

調査地全景（南から）



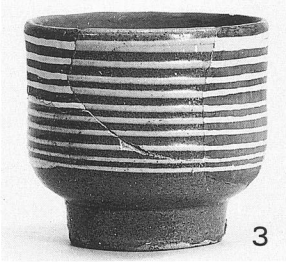
調査地全景（北から）

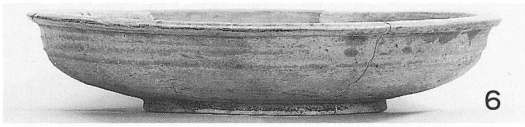
同　上

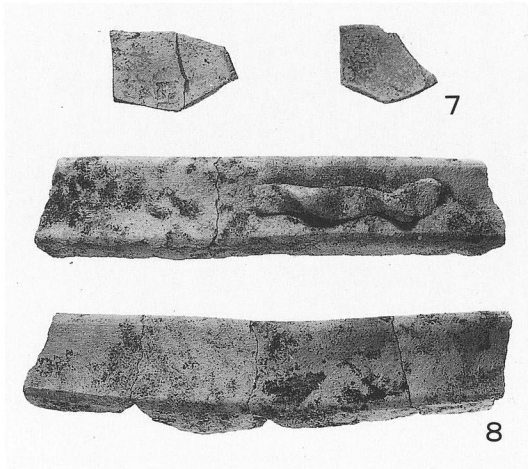


SK01.04.05

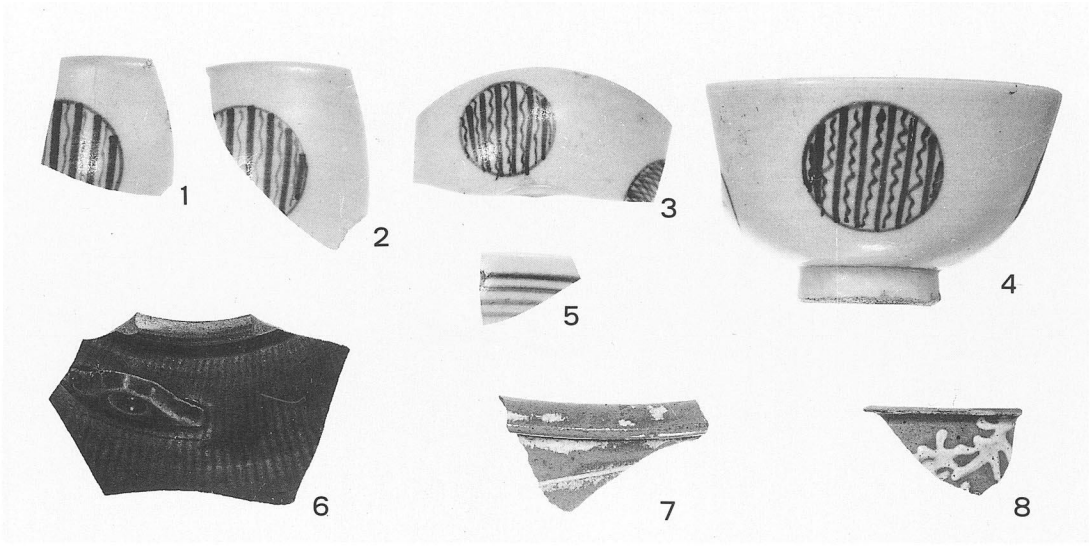
SK06

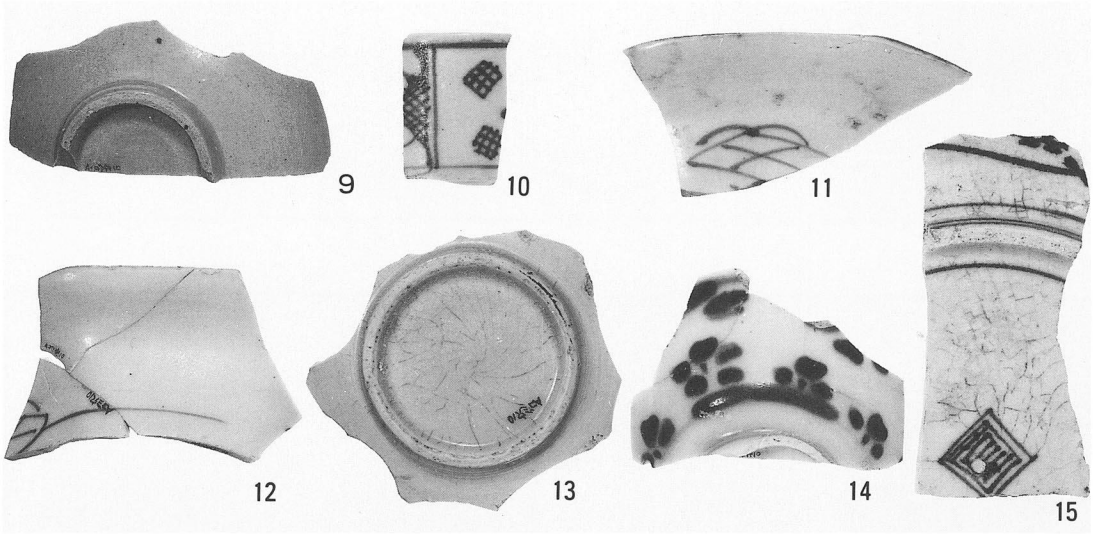


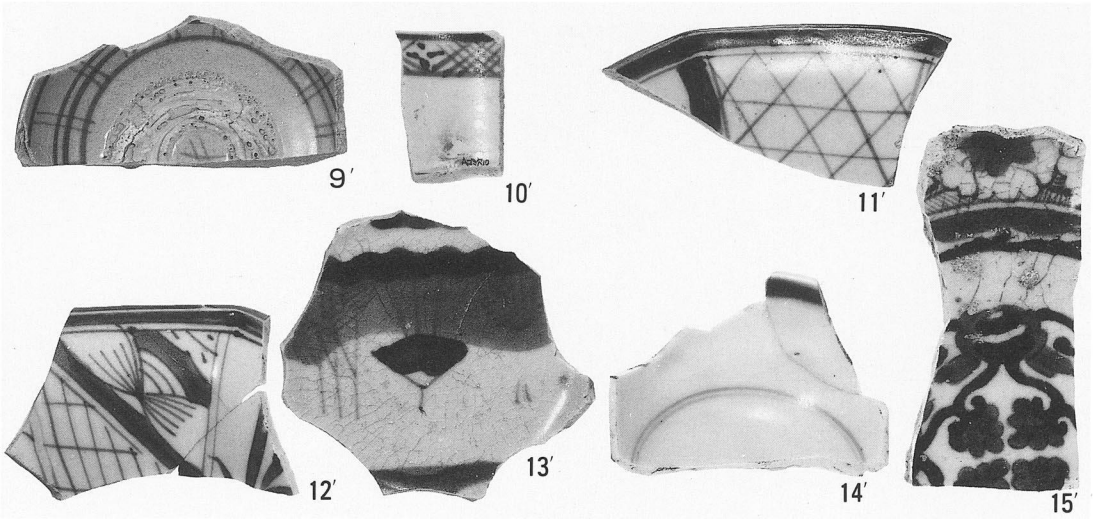




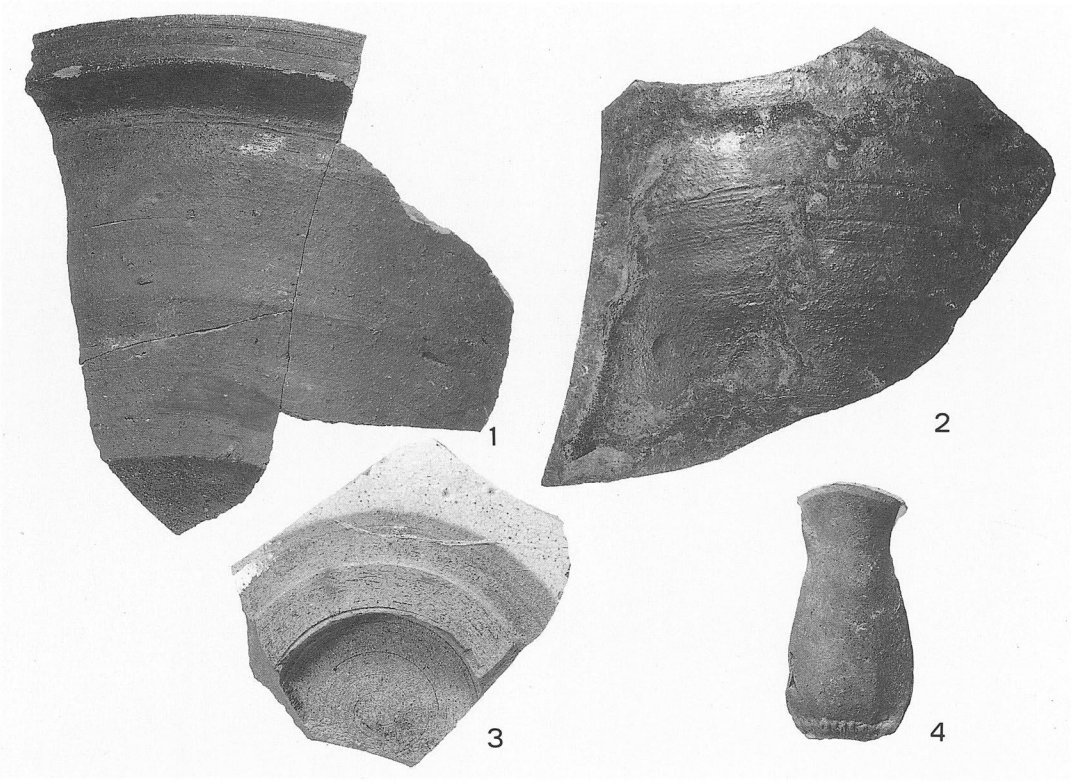
土師質焙烙（1・8）皿（7）西播系　（2・3）丹波系擂鉢（5）美濃系鉢（6）

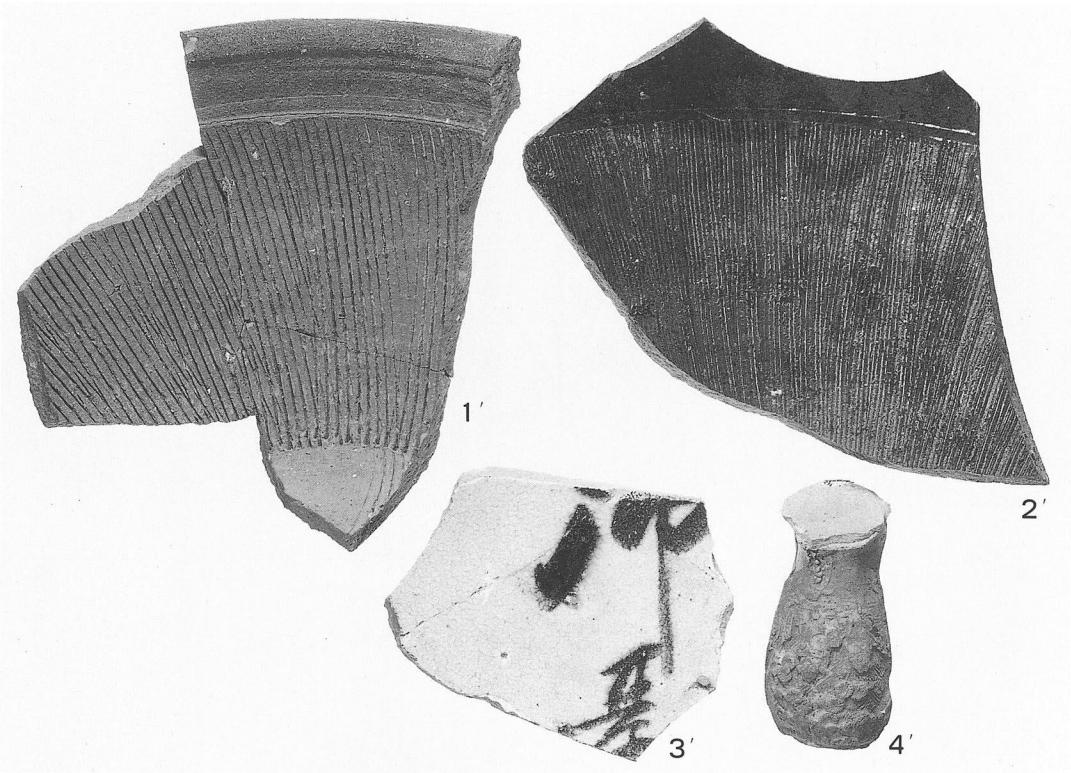




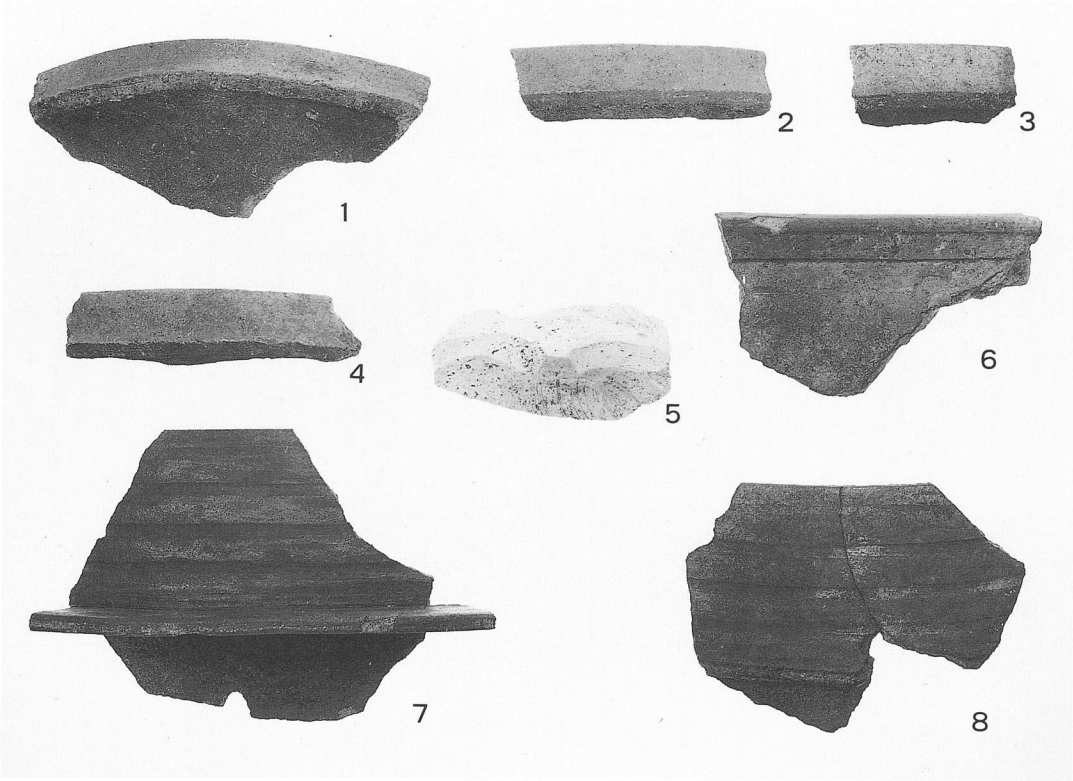


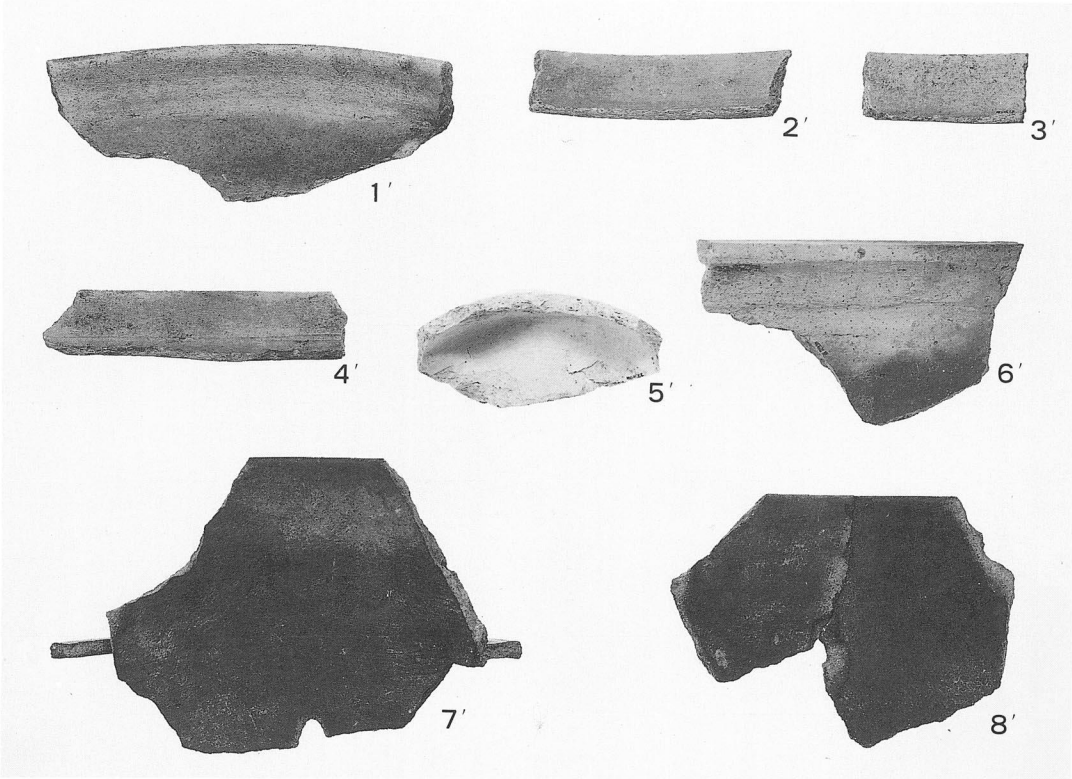
染付磁器（1～5・9～15）西播系陶器（6～8）





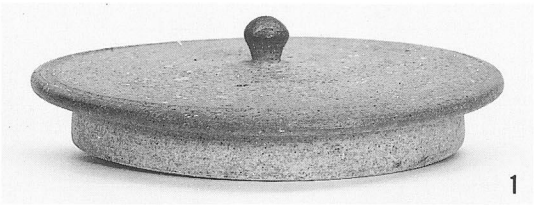
備前系擂鉢（1）丹波系擂鉢（2）西播系陶器（3・4）

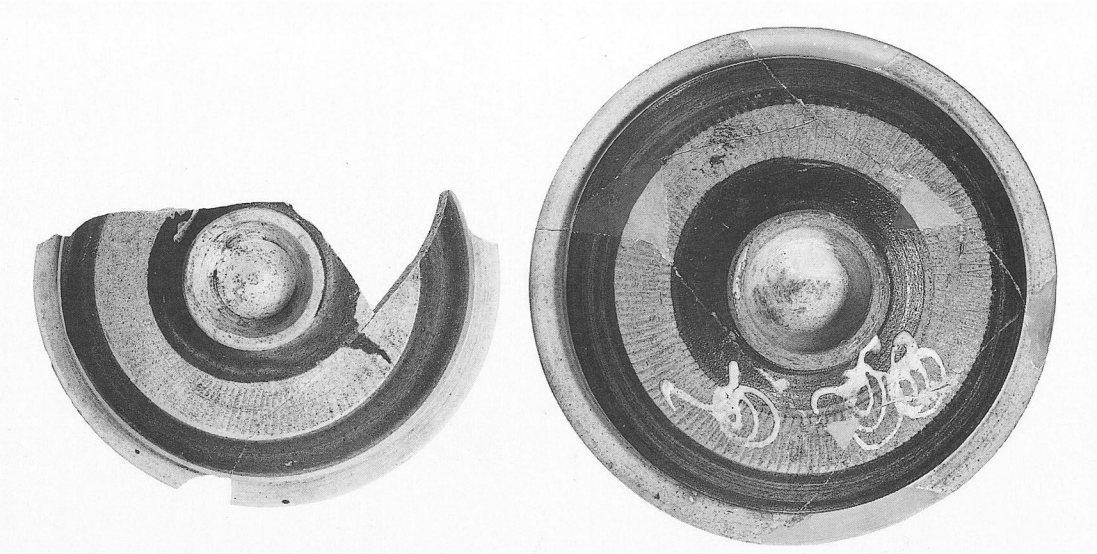


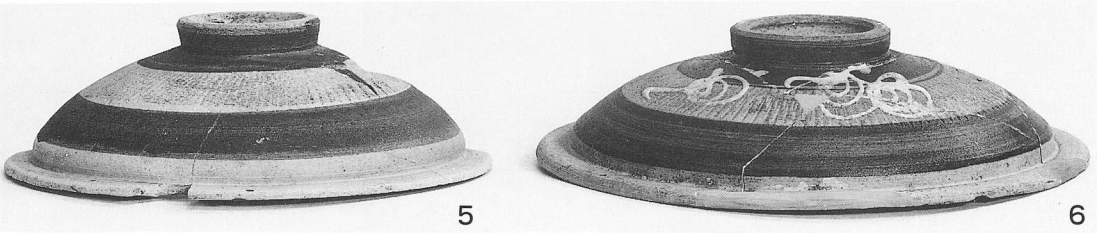


土師質焙烙（1〜4）焜炉（5）瓦質火舎（6）羽釜（7・8）

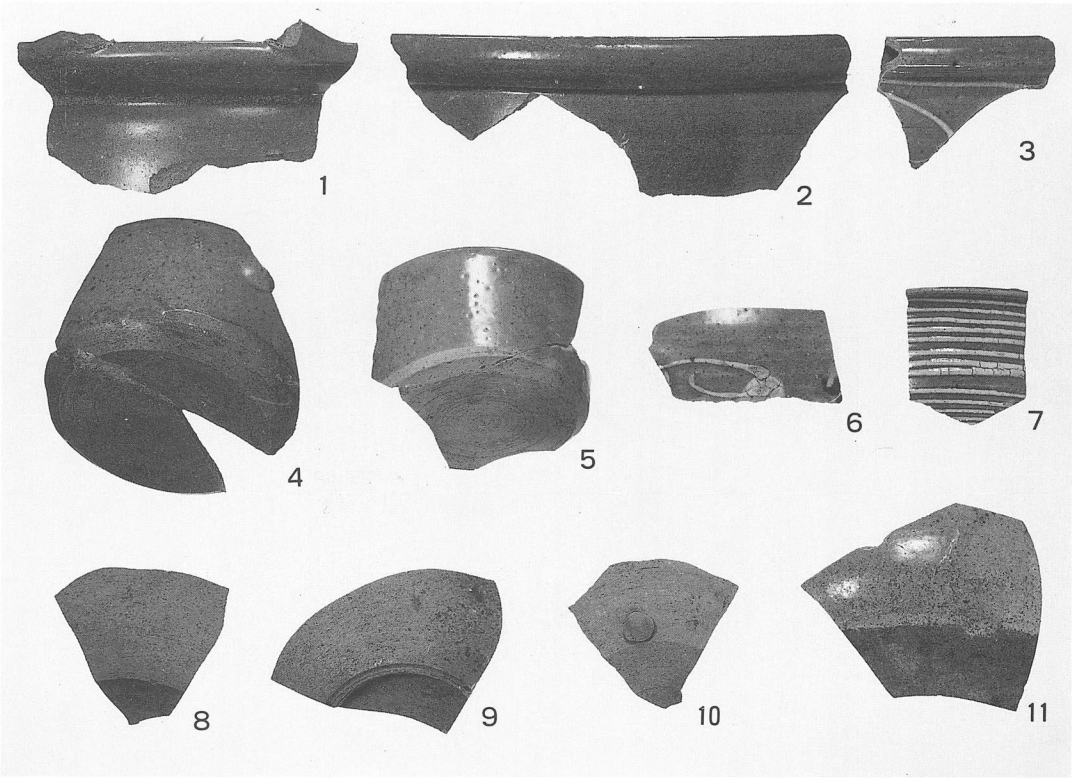
備前系擂鉢（1〜4）

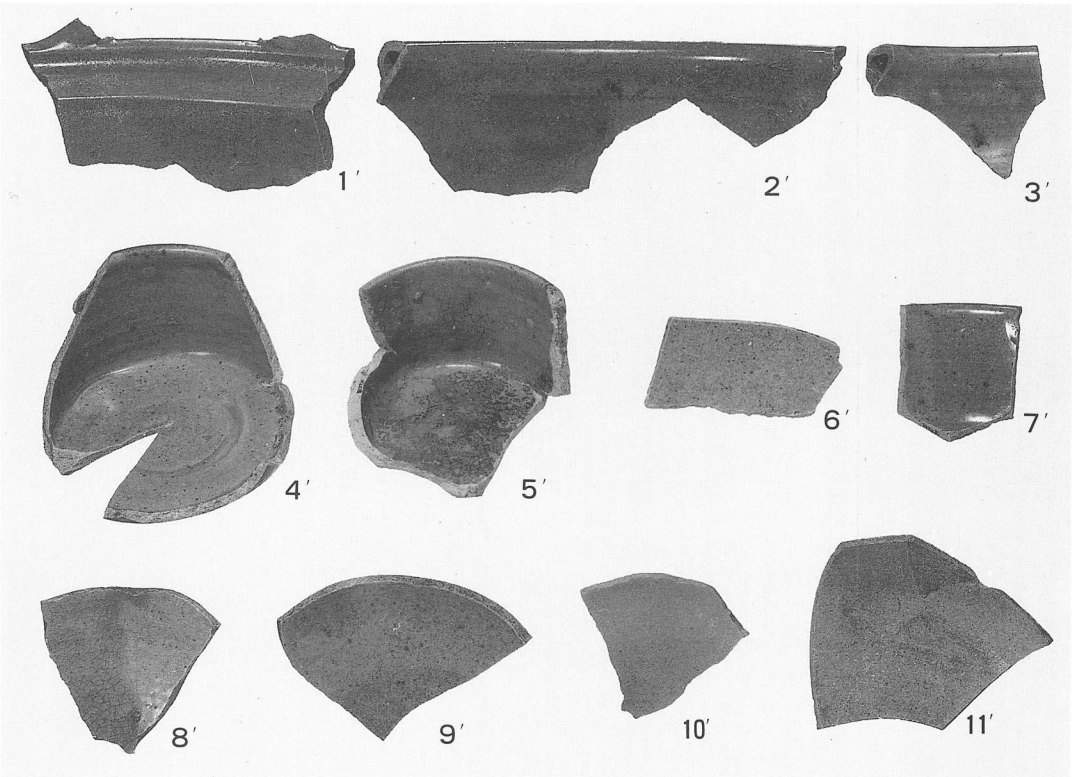




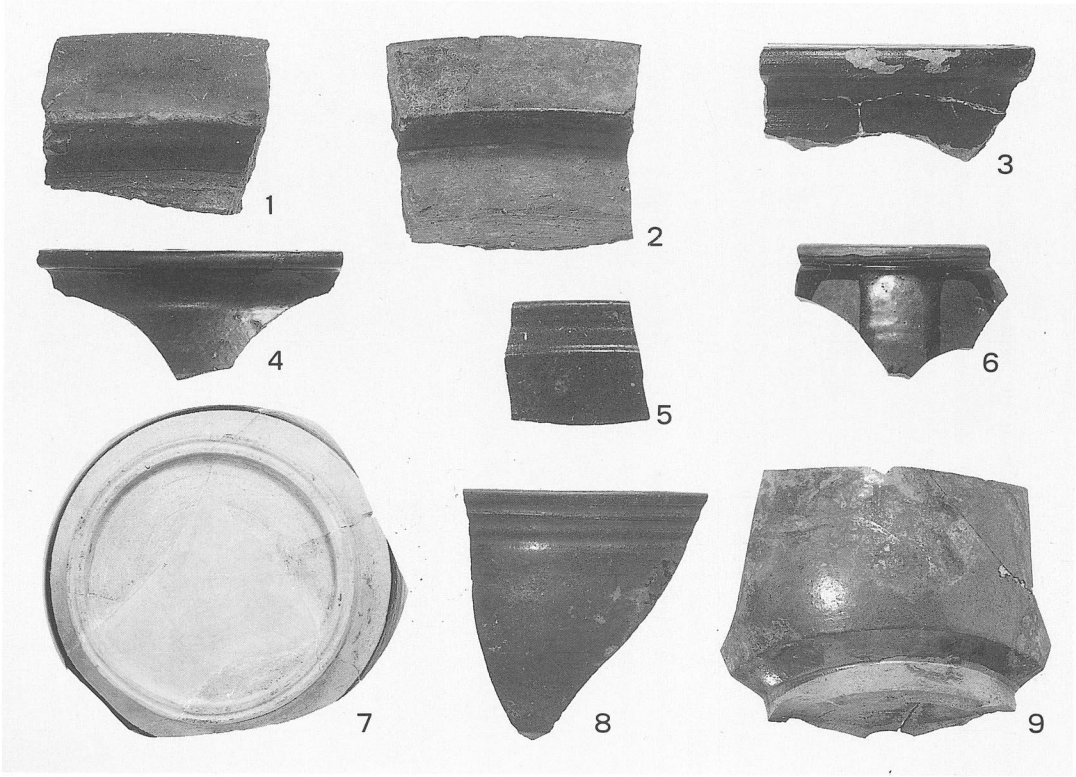


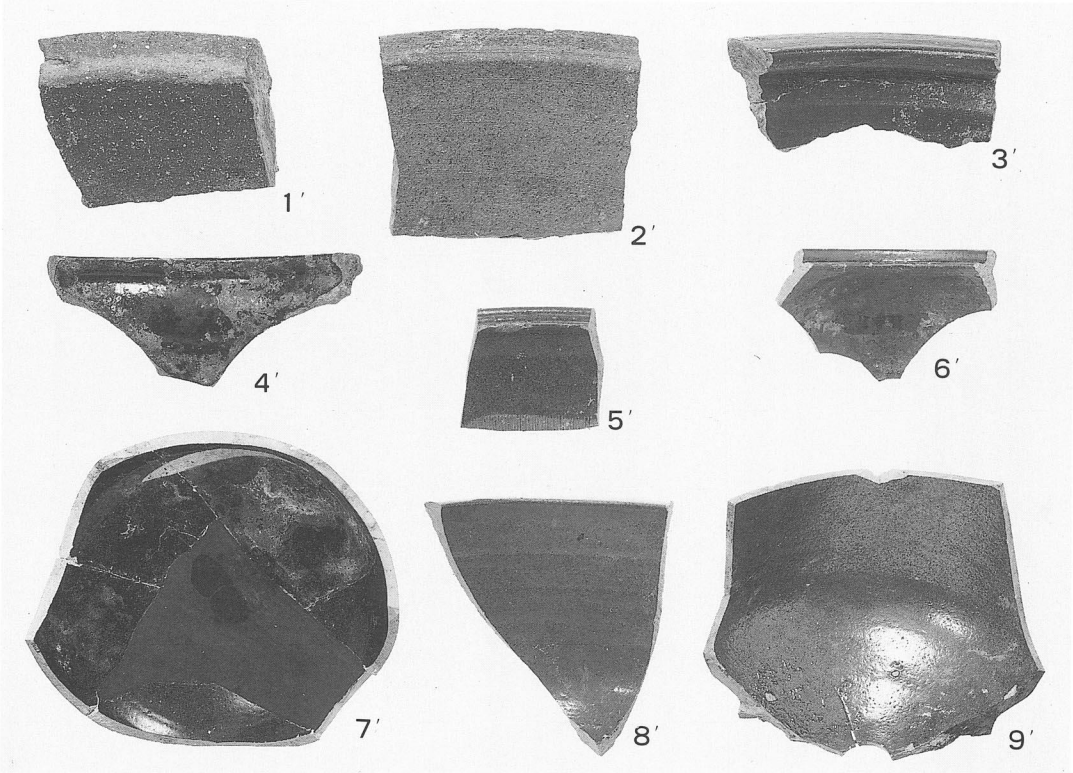
無釉陶器蓋（1）備前系匣鉢（2）西播系蓋（3・5・6）備前系擂鉢（4）



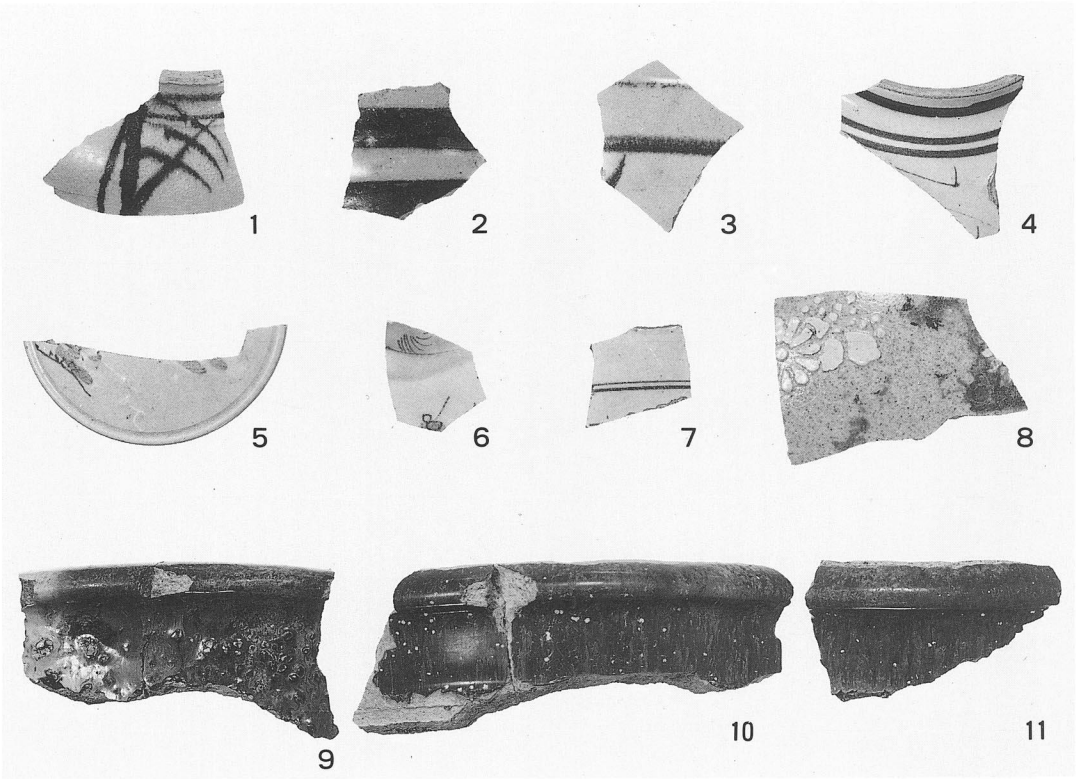


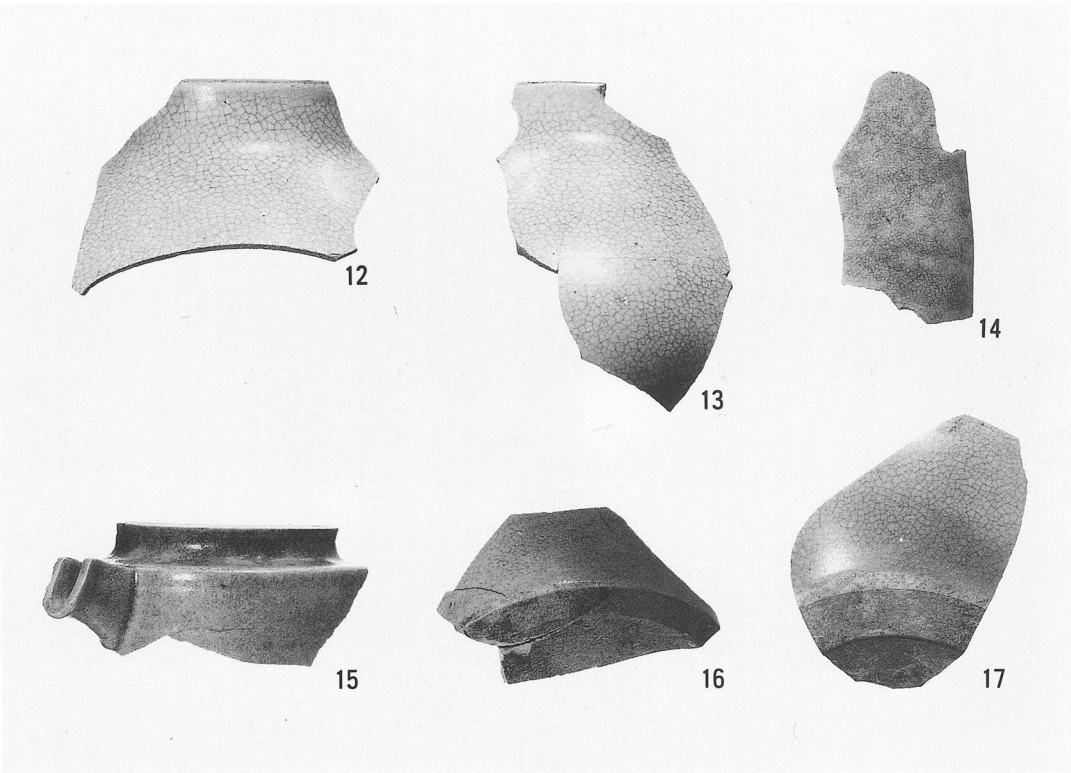
施釉陶器　堝（1〜3）•小鉢（4・5）



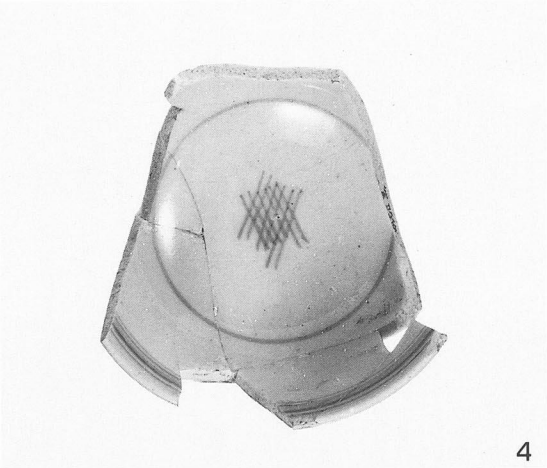


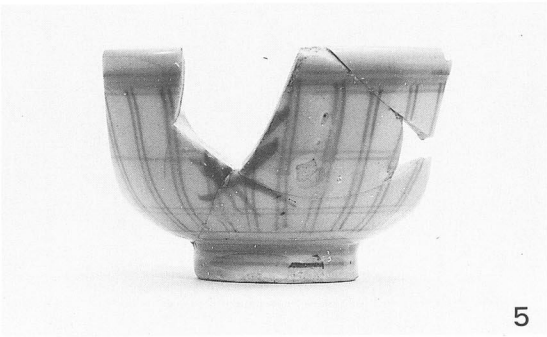
備前系　鉢（1・2）施釉陶器（3〜9）

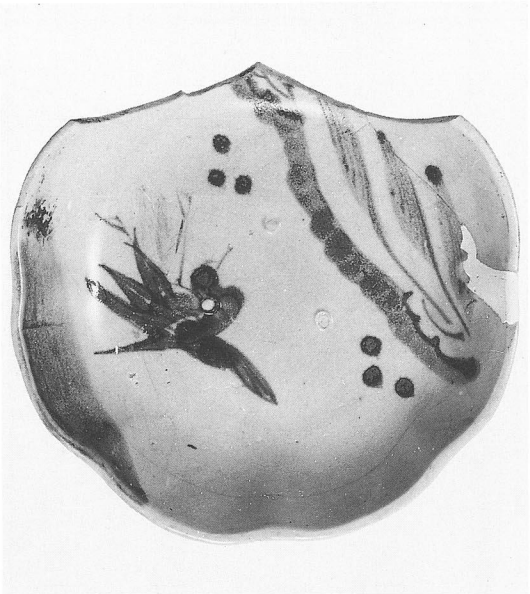


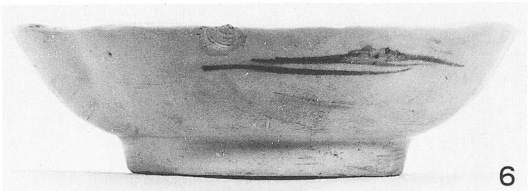


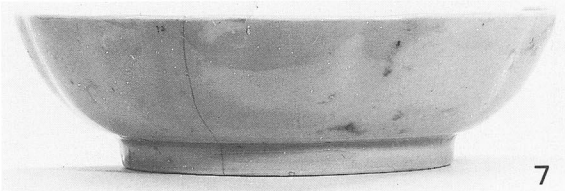
施釉陶器（1〜8）美濃系火舎（9〜11）



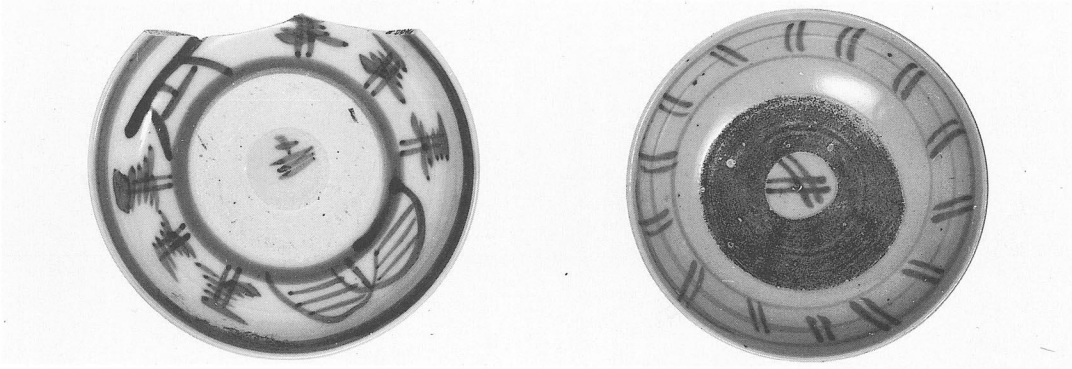








肥前系染付磁器　碗（1～5）・皿（6・7）

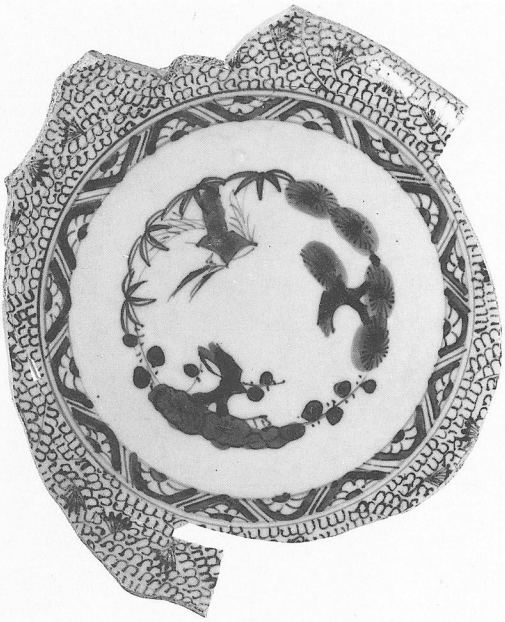


1

2

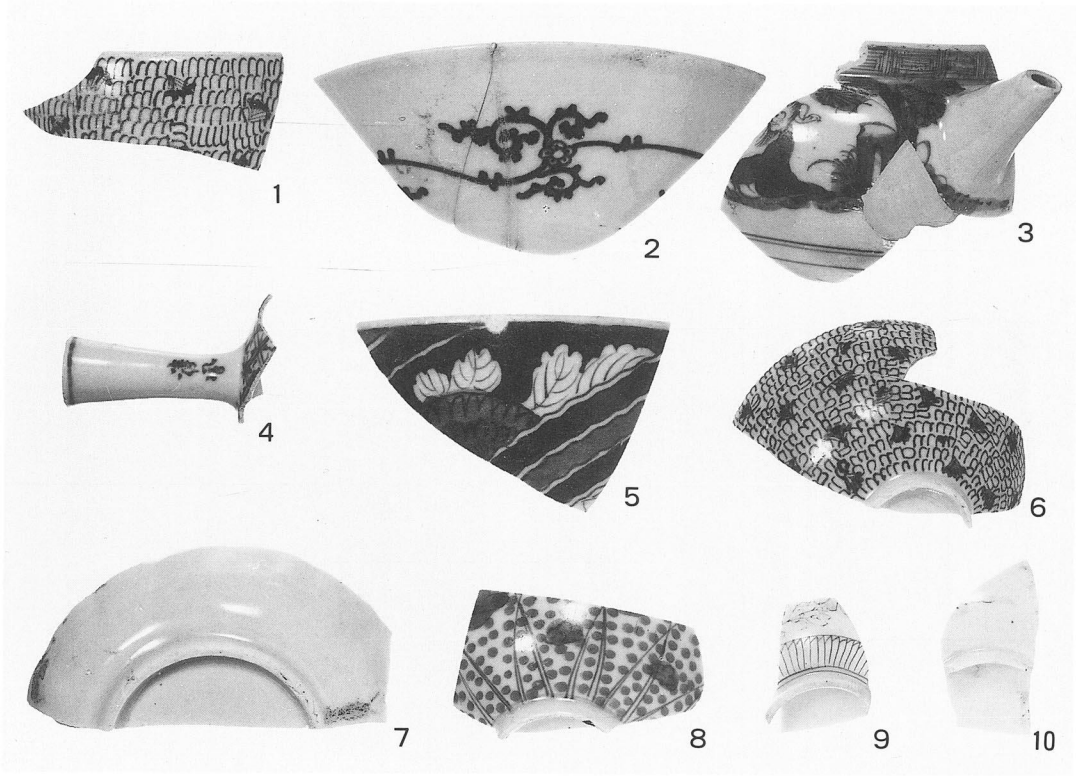
3

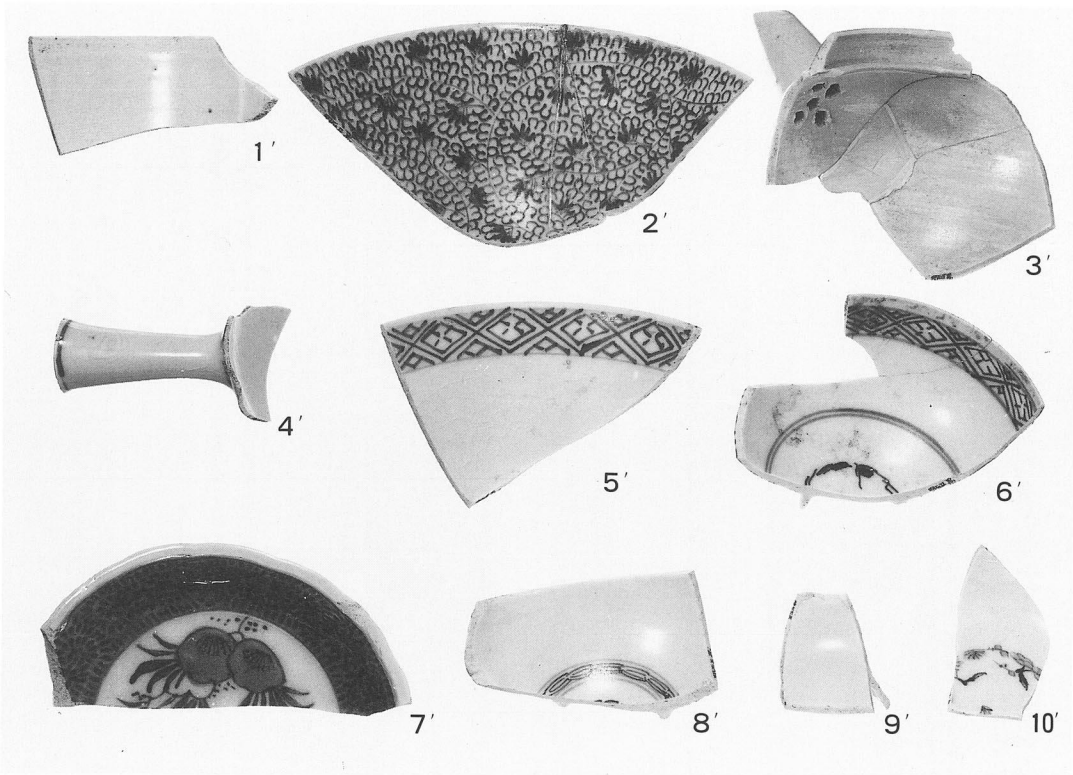
4



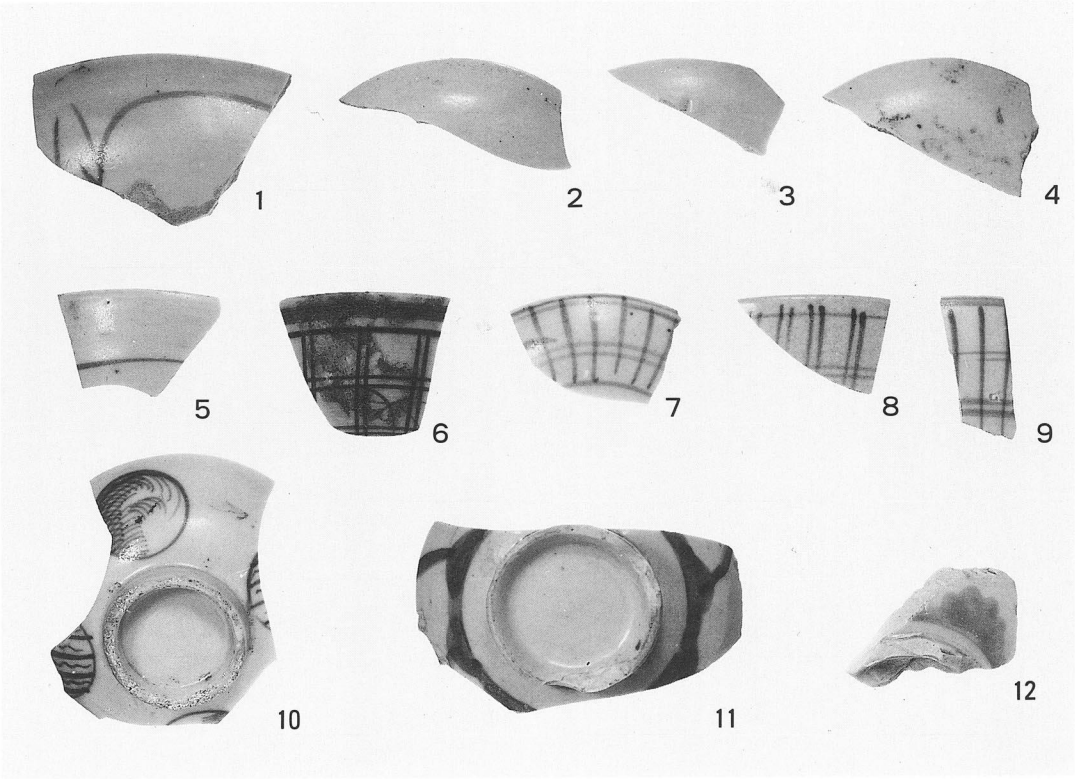
5

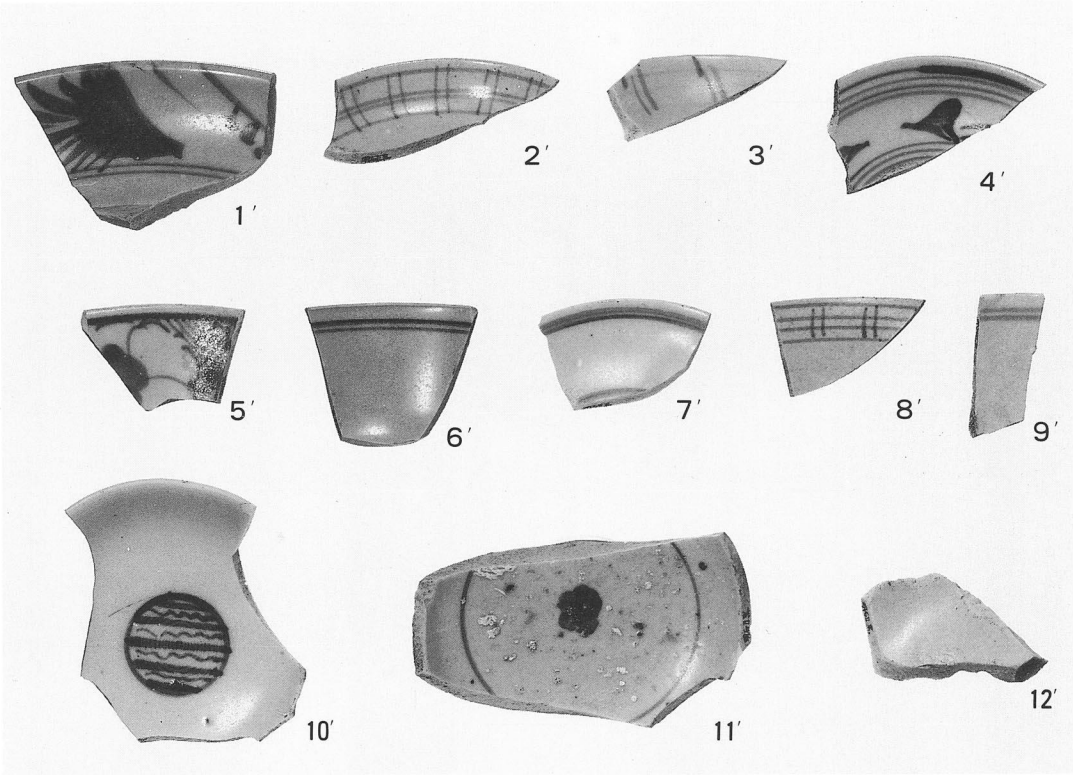
肥前系染付磁器　Ⅲ　くらわんか手（1〜4）



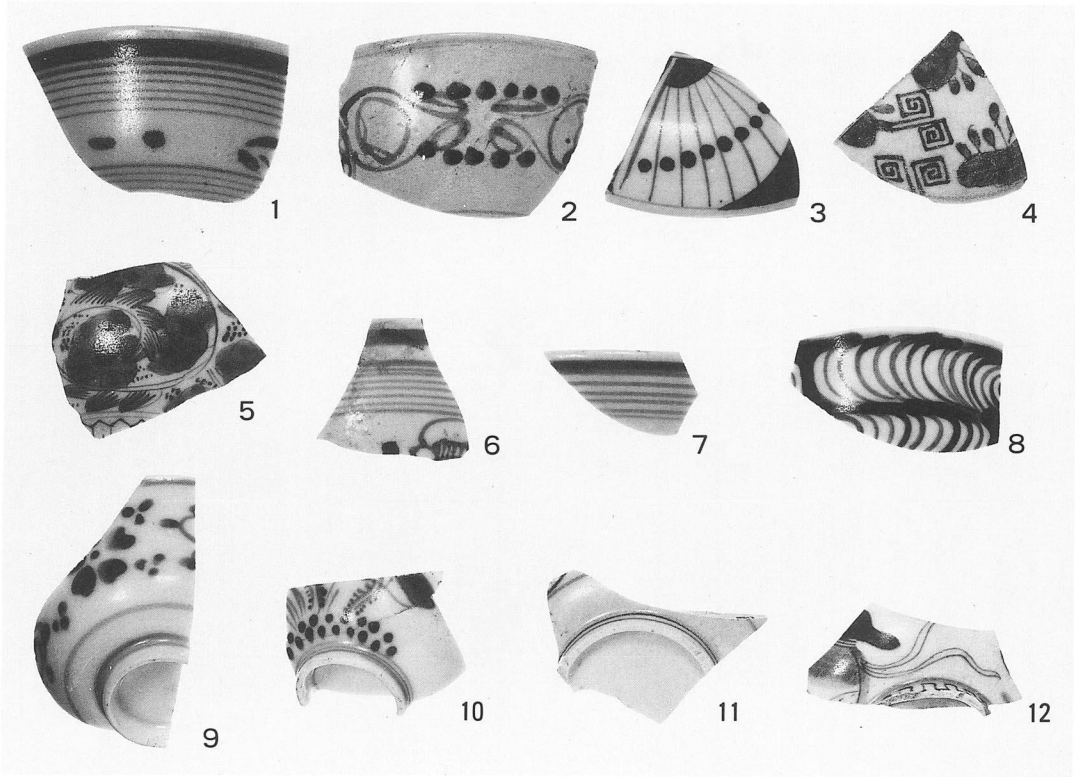


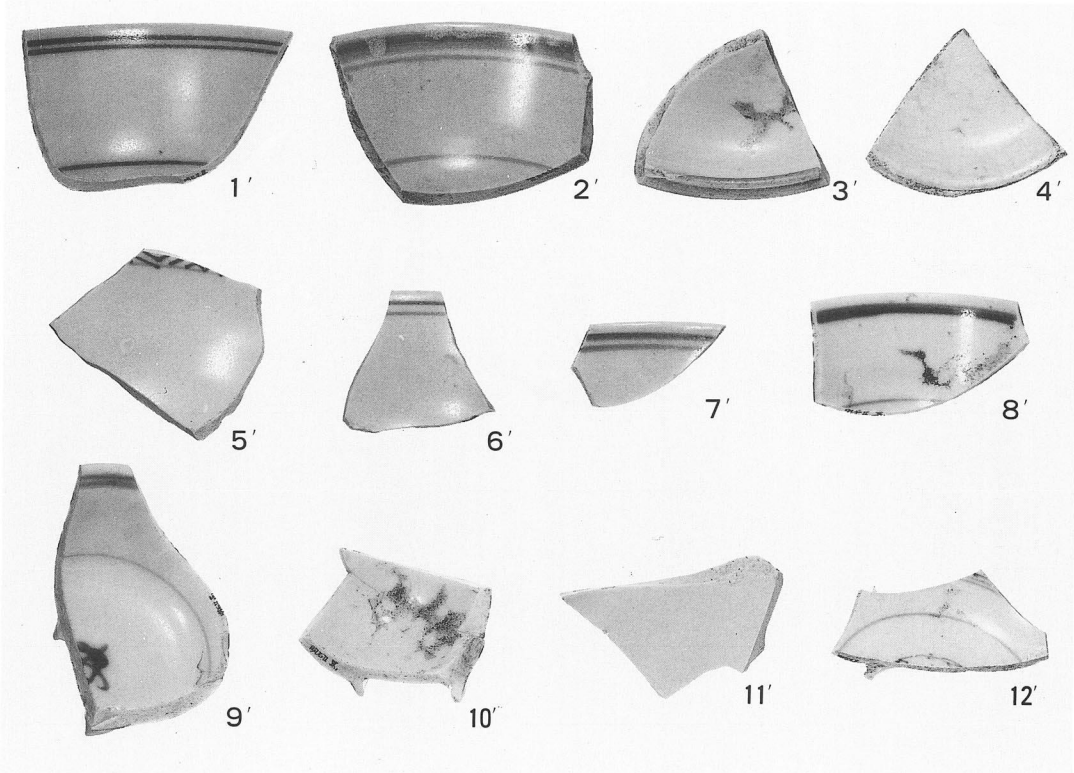
染付磁器　碗（1・5・6・8）急須（3・4）皿（7）色絵磁器（9・10）



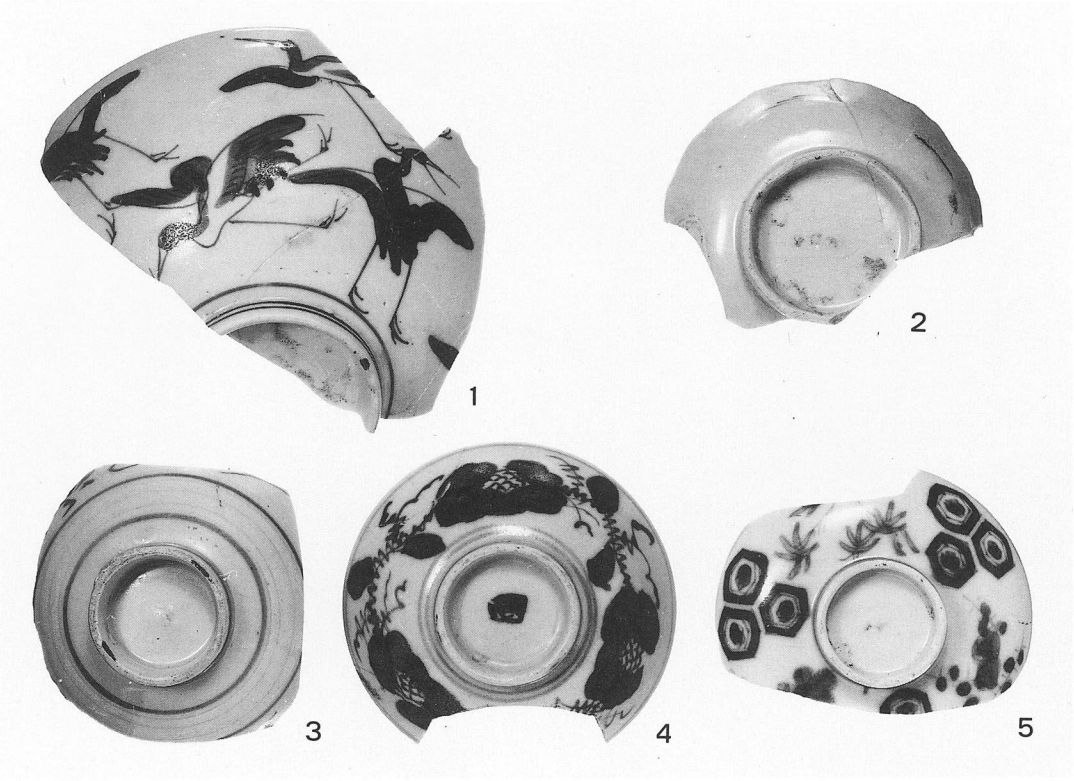


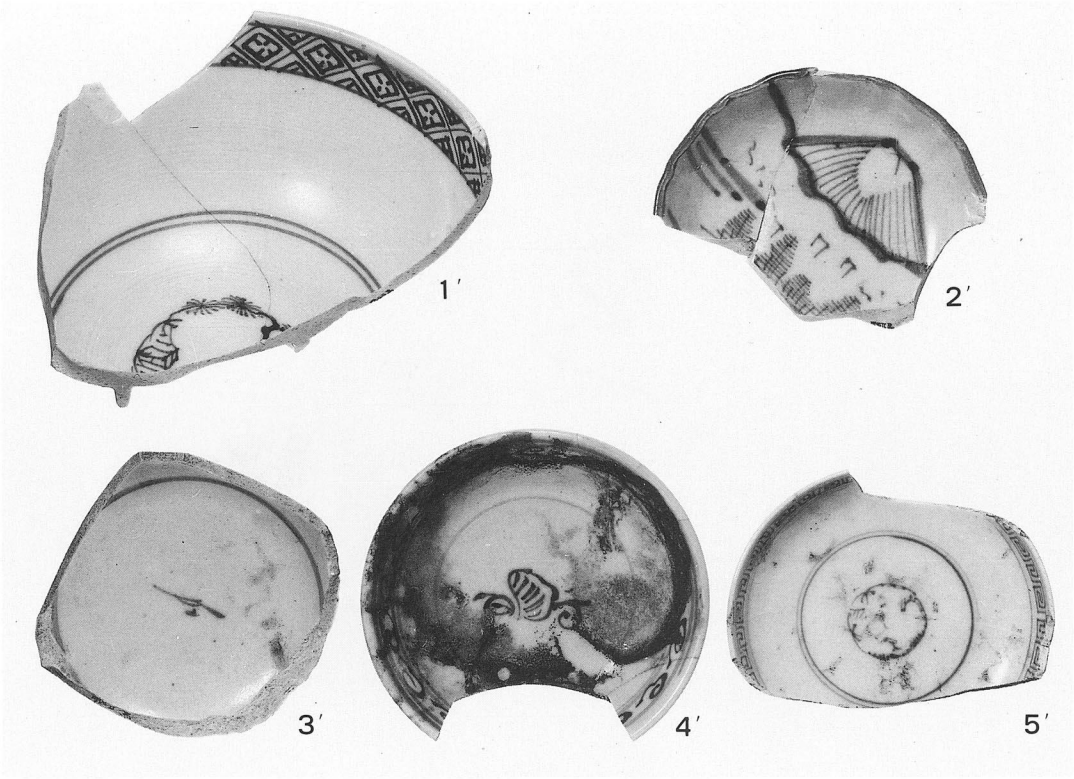
染付磁器　皿（1〜4）蓋（10）碗（11）



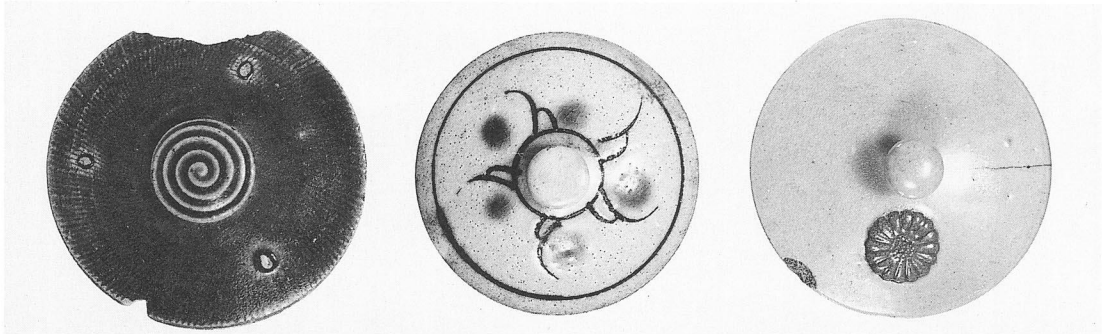


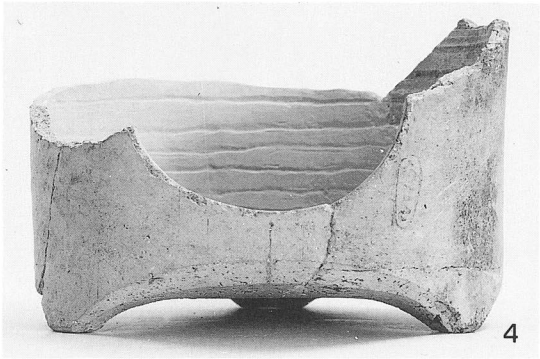
染付磁器　碗（1・2・9・10）蓋（3）

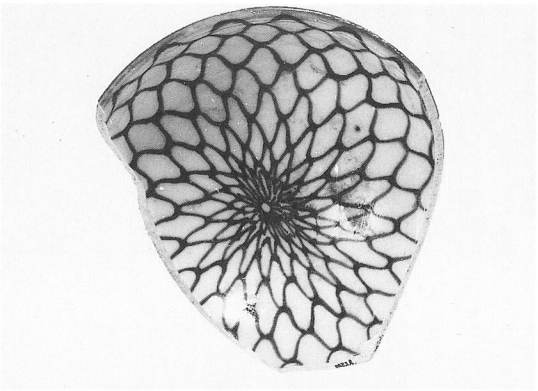


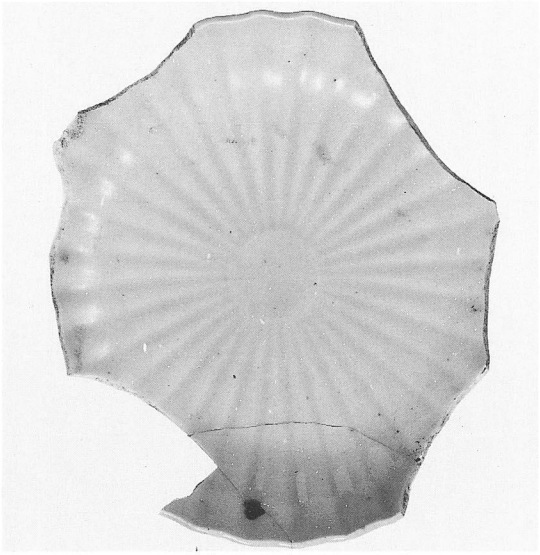


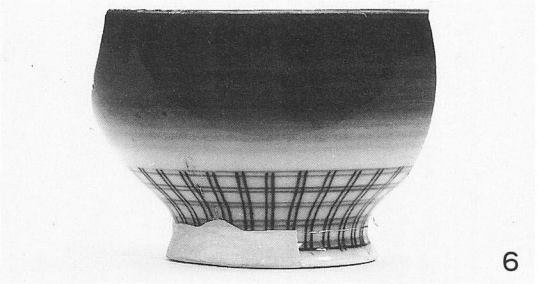
染付磁器　碗（1・3）皿（2）蓋（4・5）

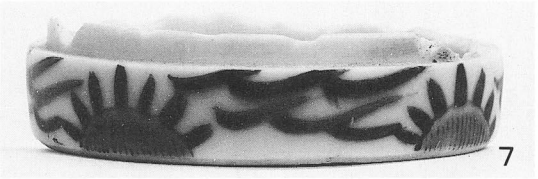


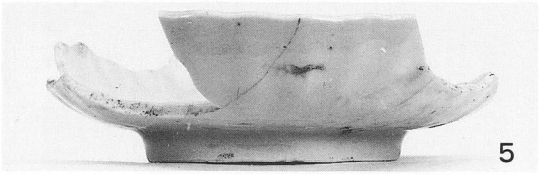


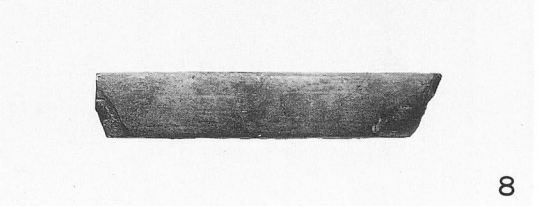












京焼系　蓋（2・3）東山系焜炉（4）白磁皿（5）染付磁器　碗（6）合子（7）ガラス製品（8）

軒丸瓦　瓦当（1～5）軒平瓦　瓦当（6・7）

兵庫県文化財調査報告書　第32冊
１９８６年３月20日　発行
明　石　城　跡　II
編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒650 神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５
ＴＥＬ (078) 531－７０１１
発行　兵　庫　県　教　育　委　員　会
〒650 神戸市中央区下山手通５丁目10－１
ＴＥＬ (078) 341－７７１１
印刷　株式会社旭　成　社
〒651 神戸市中央区二宮町１丁目２－７
ＴＥＬ (078) 222－５８００